

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XVI

平成21年3月

茨 城 県
財團法人 茨城県教育財團

茨城県教育財團文化財調査報告第322集

しま な くま やま
島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地区画整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書XVI

平成21年3月

茨 城 県
財團法人 茨城県教育財團

序

茨城県は、世界的な科学的研究の中心であるつくば市において、国際都市にふさわしい街づくりを推進しています。

その一環である「つくばエクスプレス」の整備は、つくば市と東京圏を直結させることによって人・物・情報の交流を盛んにし、地域活性化の大きな力になるものです。

そこで、平成6年7月に茨城県、つくば市、地権者が三者協議で合意に達したのを受け、新線整備と沿線開発を一体的に行う土地区画整理事業が進められてきました。

しかしながら、この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である島名熊の山遺跡が所在することから、これを記録保存の方法により保護する必要があるため、当財団が茨城県から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成7年4月から平成19年9月まで13年間にわたってこれを実施しました。そのうち、平成7～18年に実施した調査の成果については、既に当財団の『文化財調査報告第120集、第133集、第149集、第166集、第174集、第190集、第214集、第236集、第264集、第280集、第291集』として刊行したところです。

本書は、島名熊の山遺跡の平成19年度の調査の成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもちろんのこと、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることによりまして、教育・文化の向上の一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し深く感謝申し上げます。

平成21年3月

財團法人 茨城県教育財團
理事長 稲葉節生

例　　言

1 本書は、茨城県の委託により、財團法人茨城県教育財团が平成19年度に発掘調査を実施した、茨城県つくば市大字島名に所在する島名熊の山遺跡の一部である16区の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調　　査　　平成19年4月2日～平成19年9月30日

整　　理　　平成20年4月1日～平成20年6月30日

3 発掘調査は、調査課長瓦吹堅のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　川村満博

主任調査員　　柴山正広

調　　査　　員　　中村博子

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長村上和彦のもと、調査員早川麗司が担当した。

凡 例

1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ系座標を原点とし、X = +7,320m, Y = +20,200mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点であり、抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…oと小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

2 当遺跡は、「茨城県遺跡地図」（茨城県教育委員会 平成13年3月改訂）において、「熊の山遺跡」から「鳥名熊の山遺跡」と名称が変更されているが、本書では遺跡の整合性から平成7年度調査から継続の遺構番号を使用した。

3 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 S I - 住居跡 S B - 砥立柱建物跡 U P - 地下式坑 S E - 井戸跡 S D - 溝跡
S K - 土坑 Pit - ピット

遺物 P - 土器・陶磁器 T P - 拓本記録土器 D P - 土製品 Q - 石器 M - 鉄製品 G - ガラス製品
土層 K - 捣乱

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は300分の1、遺構実測図は原則として60分の1の縮尺で掲載した。
- (2) 遺物実測図は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。
- (3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■ 塗土・釉薬	■ 窯火床面・地山の崩落土
■ 窯構築材・粘土・黒色処理	■ 住抜き取り痕・油煙
● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 鉄製品・古銭	

6 遺物観察表・遺構一覧表の表記については、次のとおりである。

- (1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
 - (2) 計測値の（ ）内の数値は現存値を、〔 〕内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m, cm, gで示した。大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に単位を表示した。
 - (3) 備考欄は、土器の残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。
- 7 壁穴住居跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線、地下式坑については壁坑と主室を通る軸線とする。主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で示した（例 N-10°-E）。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 平安時代の遺構と遺物	10
(1) 堅穴住居跡	10
(2) 掘立柱建物跡	18
2 中世の遺構と遺物	19
(1) 地下式坑	19
(2) 井戸跡	23
(3) 堀跡	27
(4) 土坑	32
3 近世の遺構と遺物	32
溝跡	33
4 近代の遺構と遺物	34
校舎基礎跡	34
5 その他の遺構と遺物	36
(1) 堅穴住居跡	36
(2) 井戸跡	38
(3) 溝跡	41
(4) 土坑	46
(5) ピット	53
(6) 遺構外出土遺物	53
第4節 まとめ	56

写真図版

抄録

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成6年8月18日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業（つくば市島名）における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成6年9月19～27日に現地踏査を、平成17年11月28・29日（平成19年度調査分）に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成7年3月8日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、事業地内に島名熊の山遺跡が所在する旨回答した。

平成7年3月14日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項（現第94条）の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成7年3月16日、茨城県知事あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成19年2月23日、茨城県知事は、茨城県教育委員会教育長に対して、島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成19年2月26日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県知事あてに、島名熊の山遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

財團法人茨城県教育財團は、茨城県知事から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成19年4月2日から平成19年9月30日まで、島名熊の山遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

調査は、平成19年4月2日から平成19年9月30日まで実施した。その概要を表で記載する。

期間 工程	4月	5月	6月	7月	8月	9月
調査準備 表土除去 遺構確認						
遺構調査						
遺物洗浄 注記作業 写真整理						
補足調査 撤収						

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

今回報告する島名熊の山遺跡16区は、茨城県つくば市大字島名字寺ノ前1676番地の1ほかに所在している。つくば市は、標高約26mの筑波・鶴敷台地上に位置している。この台地は、東を霞ヶ浦に流入している桜川、西を利根川に合流している小貝川によって区切られており、さらに両河川の間には、東から花室川、蓮沼川、小野川、東谷田川、西谷田川などの中小河川が南流している。これらの河川によって台地の縁が樹枝状に開析されており、谷津や低地が細長く形成されている。

当遺跡がある旧谷田部町域の島名地区は、東谷田川と西谷田川に挟まれた台地上に位置している。遺跡は、その台地上の東谷田川に面した標高15~24mの低地から台地上に広がっており、深い谷津や埋没谷が、遺跡を囲むように入り込んでいる¹⁾。今回報告する調査区は、平成18年度に報告した16区の北側にあたり、標高20~23mの台地上である。調査前の現況は、畑地である。

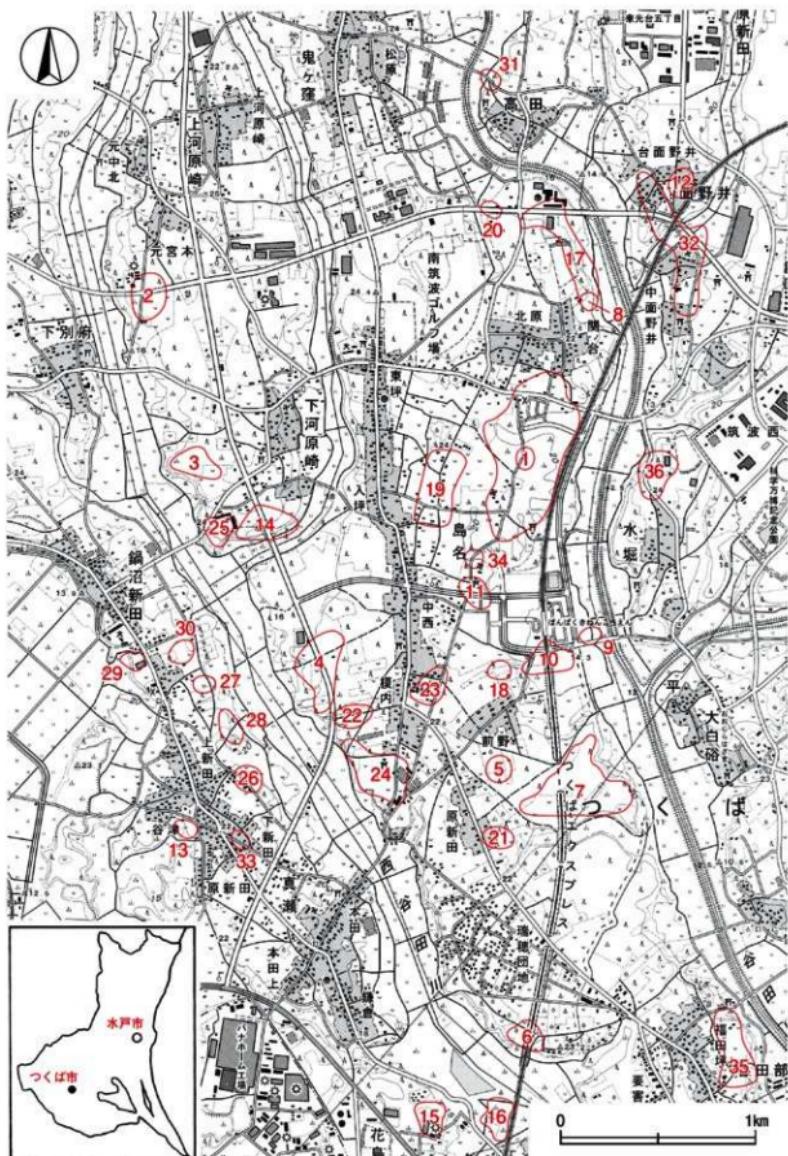
第2節 歴史的環境

ここでは、東谷田川、西谷田川流域に分布し、当遺跡と時期を同じくする古墳時代から中世にかけての遺跡を中心に、調査の成果をもとに記述する。

両河川の流域は、古墳時代になると遺跡数が増加している。奈良・平安時代になると島名地区は、河内郡島名郷に属し、真幡郷、八部郷と接している。この地域の集落の消長は、①古墳時代で終わる集落、②古墳時代から奈良時代へと継続せずに一度途絶え、奈良・平安時代のある時期に、再び形成される集落、③古墳時代から奈良時代へと継続する集落、の3つに大別される。

古墳時代で終わる集落は、^{1) たとえばもとよりある}元宮本前山遺跡²⁾（2）、下河原崎谷中台遺跡³⁾（3）、島名ツバタ遺跡⁴⁾（4）、島名一町田遺跡⁵⁾（5）、矢田部塗遺跡⁶⁾（6）、^{7) なまけいわゆる}島名坂松遺跡⁷⁾（7）が該当する。島名一町田遺跡は前期のみ、元宮本前山遺跡は中期のみ、島名坂松遺跡は後期のみの短期間で集落が途絶える。島名ツバタ遺跡は、前期は方形周溝墓が3基確認され墓域となっており、集落の形成は中期からである。5世紀後葉に集落は形成され、5世紀末葉で一時途絶える。6世紀後半になって再び集落が形成され、短期間で途絶える。集落が途絶えた後は墓域となり、終末期と考えられる方墳1基が確認されている。下河原崎谷中台遺跡は、5世紀に形成された集落は、後期になって一時途絶え、6世紀中葉になって再び形成され、6世紀後葉で途絶える。谷田部塗遺跡は、5世紀に形成された集落が後期で一時途絶え、7世紀になって再び形成され、短期間で途絶える。

古墳時代から奈良時代へと継続しない集落は、島名閑ノ台南B遺跡⁸⁾（8）、島名前野遺跡⁹⁾（9）、島名前野東遺跡¹⁰⁾（10）が該当する。島名閑ノ台南B遺跡は中期に集落が形成され、短期間で途絶える。後期は円墳が1基確認されており、島名閑ノ台南古墳群とともに墓域となっていたものと考えられる。古墳時代後期から奈良時代にかけては空白期間で、9世紀中葉になって鍛冶工房をもつ集落が再び形成され、9世紀後葉で途絶える。埴輪と考えられる銅滓が付着した須恵器片が出土していることから銅の精錬施設の存在や、三彩陶器片や鉄鉢形土器の出土から、仏教関連施設の存在が指摘されている。島名前野遺跡では、前期から中期へと住居数を減少しながらも継続し、後期になって一時途絶える。8世紀中葉に再び形成され、8世紀後葉で途絶える。



第1図 島名熊の山遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 1：25,000「谷田部」）

表1 島名熊の山遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代						
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良			旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良	中世	近世
①	島名熊の山遺跡	○		○	○	○	○	19	島名本田遺跡			○	○	○	○
2	元宮本前山遺跡	○	○		○			20	島名閔ノ台遺跡			○			
3	下河原崎谷中台遺跡	○	○		○			21	島名タカドロ遺跡		○	○			
4	島名ツバタ遺跡	○		○				22	島名榎内遺跡			○			
5	島名一町田遺跡	○		○				23	島名榎内古墳群			○			
6	谷田部漆遺跡	○		○	○			24	島名榎内南遺跡	○		○	○		
7	島名境松遺跡	○		○				25	下河原崎高山遺跡		○	○			
8	島名閔ノ台南B遺跡			○	○	○		26	真瀬新田古墳群			○			
9	島名前野遺跡	○		○	○			27	真瀬堀附北遺跡			○			
10	島名前野東遺跡	○		○	○	○	○	28	真瀬堀附南遺跡			○			
11	島名八幡前遺跡			○	○	○		29	真瀬山田北遺跡	○		○			
12	面野井北ノ前遺跡		○		○	○		30	鍋沼神田長峰遺跡	○		○			
13	真瀬新田谷津遺跡	○						31	高田和田台遺跡			○			
14	下河原崎高山古墳群			○				32	面野井古墳群			○			
15	真瀬三度山遺跡	○		○		○		33	真瀬中畠遺跡	○		○			
16	上萱丸古屋敷遺跡	○		○	○	○		34	島名薬師遺跡			○			
17	島名閔ノ台古墳群			○				35	谷田部福田前遺跡	○	○	○			
18	島名前野古墳			○				36	水堀下道遺跡			○			

島名前野東遺跡は、前期から中期へと住居数を増加させながら継続し、後期になってもほぼ同じ規模で継続し、一時途絶える。8世紀中葉に、掘立柱建物と区画溝をもつ集落が再び形成され、8世紀後葉をもって途絶える。古墳時代から奈良時代へと継続する集落は、島名八幡前遺跡^{11) (II)}が該当する。遺構は確認されていないが、未調査区に前期の住居跡の存在が指摘されており、本遺跡に集落が形成されるのは前期と推測されている。遺構が確認されるのは、5世紀前半からである。5世紀後半から6世紀前半の間に7世紀中葉に集落の断絶がみられる。7世紀末葉に小規模ながら再び集落が形成され、8世紀になると大規模化する。その後集落は9世紀末葉まで継続し、終息を迎える。島名八幡前遺跡は、8世紀の集落の拡大から終息する9世紀まで連続と鍛冶生産が行われていたことがわかつており、島名熊の山遺跡の集落の鍛冶集団との密接な関係が指摘されている。

島名熊の山遺跡も、古墳時代から奈良時代へと継続する集落である。今までの調査で住居跡2221軒、掘立柱建物跡356棟などが確認され¹²⁾。遺構の質・量、遺物とともに周辺の遺跡とは隔絶しており、島名郷の交通や物流の中心的集落と考えられている。古墳時代前期に形成された集落は6世紀後半になって拡大し、律令期が衰

退し11世紀になっても集落が展開している。古墳時代後期後半から營まれる集落は、律令体制に組み込まれながらも独自の経営基盤のもとに連絡と展開し、中世に続いている。島名熊の山遺跡の集落を拠点とし、周辺集落は消長を繰り返し統合されていくのである。

11世紀までは集落の消長が確認されているが、その後は堅穴住居から平地住居への転換の時期と重なるため不明瞭になっていく。しかし、当遺跡の墓坑や井戸跡からは平安時代末期と考えられる和鏡や小銅仏が出土しており、遺物の面から有力者層の存在をうかがうことができる。

中世になると方形居館跡が確認された前野東遺跡¹⁰に中心を移すものと考えられ、居館内に居住する在地有力者が当遺跡の所在する島名地区一帯を治めていくものと考えられる。13世紀末頃、当遺跡の中央部西寄りに妙徳寺が開山される。妙徳寺に隣接している16区では、掘立柱建物跡、地下式坑、墓坑や墓坑の可能性がある土坑などや、15世紀後半から17世紀前半にかけての堀跡や溝跡が確認されている。また、当遺跡中央部からは鉄造土坑が確認され、燈籠の蓮華座や梵鐘の乳、鍔口などの鋳型片が出土しており、生産に従事する人々の存在がうかがわれる。

古墳時代から続く当遺跡は、長くこの地域の中心であったものと考えられる。

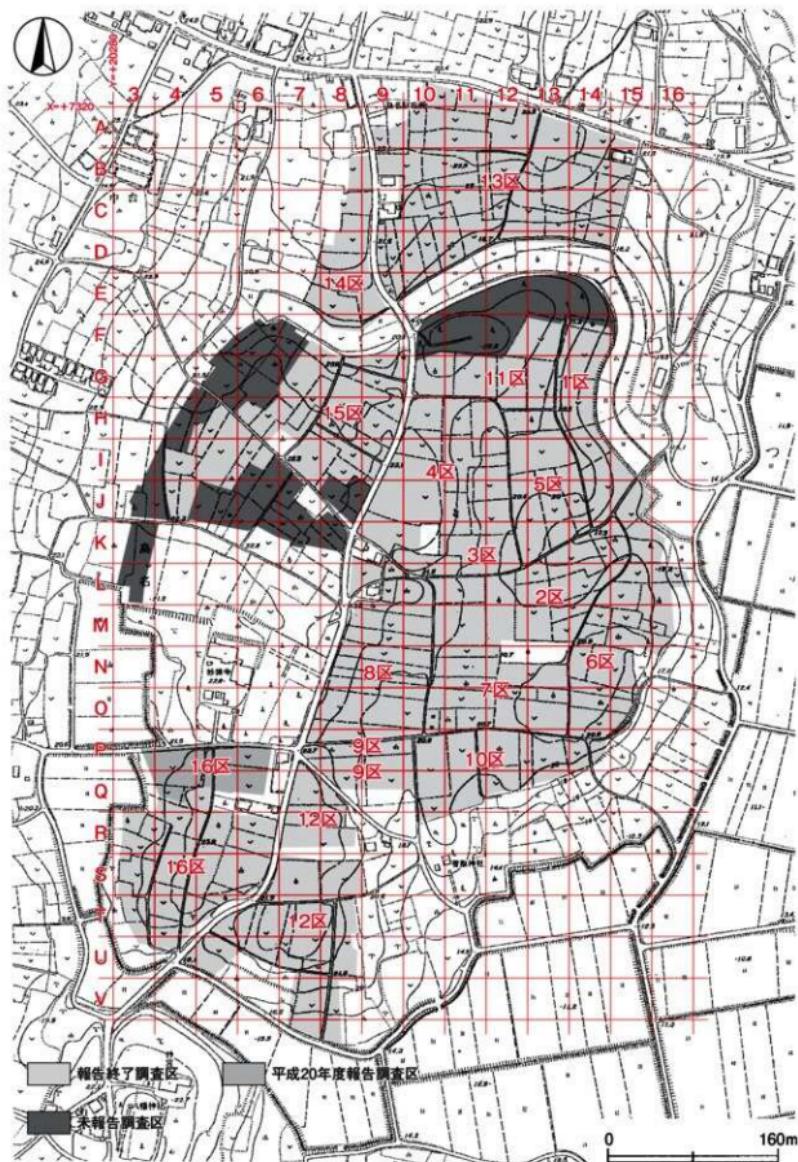
※ 文中の〈〉内の番号は、表1及び第1図の該当番号と同じである。

註

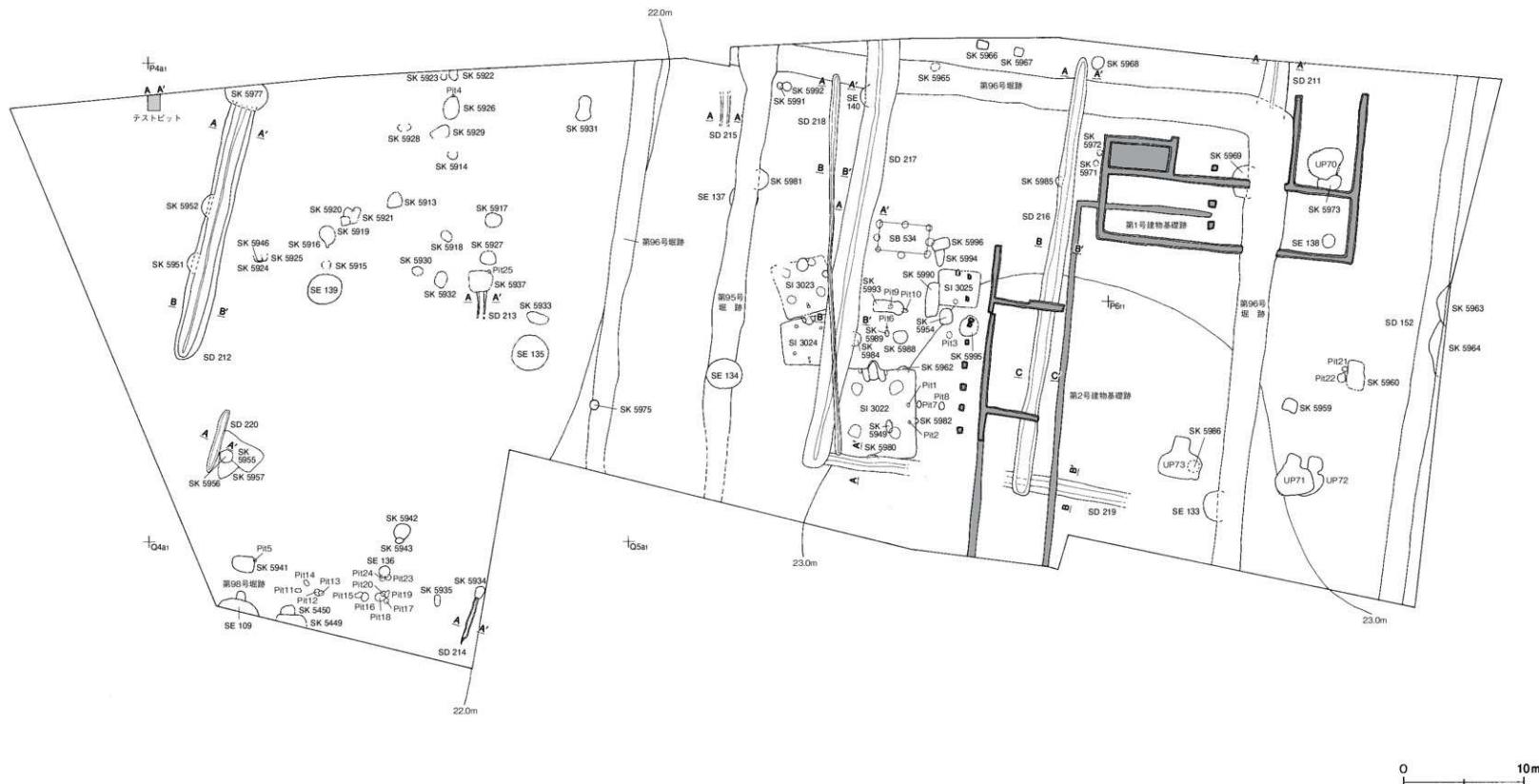
- 1) 清水哲「島名熊の山遺跡の集落研究のための前提作業」『埋蔵文化財部年報26(平成18年度)』財团法人茨城県教育財團2007年11月
- 2) 高野裕樹「元宮本前山遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第265集 2006年3月
- 3) a) 高野裕樹「下河原崎谷中台遺跡 烏名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第282集 2007年3月
b) 斎藤真弥「下河原崎谷中台遺跡 下河原崎高山古墳群 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書4」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第292集 2008年3月
- 4) a) 皆川修「島名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第203集 2003年3月
b) 高野裕樹「下河原崎谷中台遺跡 烏名ツバタ遺跡 上河原崎・中西特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書3」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第282集 2007年3月
- 5) 鹿島直哉「島名一町田遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業及び常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第231集 2004年3月
- 6) 寺門千鶴 田原康司 梅澤貴司「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 烏名前野東道路島名松遺跡 谷田部塗道跡」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第191集 2002年3月
- 7) 註6文献と同じ
- 8) 斎藤直哉「島名関ノ台南B遺跡・面對野北ノ前遺跡 常磐新線建設工事地内埋蔵文化財調査報告書2」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第231集 2004年3月
- 9) 稲田義典「島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 烏名前野遺跡」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第175集 2001年3月
- 10) a) 註6文献と同じ
b) 小笠原和治「島名前野遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第281集 2007年3月
- 11) a) 青木仁昌 吹野富美夫「島名八幡前遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第201集 2003年3月
b) 菊池直哉「島名八幡前遺跡 都市計画道路島名上河原崎線道路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財團文化財調査報告書」第283集 2007年3月
- 12) 斎藤真弥 酒井雄一 渡邊浩実 松本直人 斎藤貴史 清水哲「島名熊の山遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」「茨城県教育財團文化財調査報告」第291集 2008年3月
- 13) 註6文献、註10b文献と同じ
- 14) 酒井雄一 渡邊浩実 斎藤貴史 清水哲「島名熊の山遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」「茨城県教育財團文化財調査報告」第280集 2007年3月

参考文献

- 植田義弘「島名熊の山遺跡 烏名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ」「茨城県教育財團文化財調査報告」第190集 2002年3月
「古代地方官衙周辺における集落の様相－常陸国河内部を中心として－」 茨城県考古学協会 2005年2月



第2図 島名熊の山遺跡調査区設定図（つくば市研究学園都市計画図2,500分の1）



第3図 島名熊の山遺跡全体図 (■は校舎基礎跡)

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

鳥名熊の山遺跡は、東谷田川と西谷田川に挟まれた、標高15~24mの低地から台地上にかけて立地している。

調査区は、便宜上1~16区に分けられている。今回報告するのは16区で、平成18年度に報告した16区の北側にある。調査面積は4,863m²で、調査前の現況は、畑地である。

調査によって、平安時代、中世、近世、近代を中心とした遺構と遺物が確認された。確認された遺構は、堅穴住居跡4軒（平安時代2、時期不明2）、掘立柱建物跡1棟（平安時代）、地下式坑4基（中世）、井戸跡9基（中世4、時期不明5）、堀跡3条（中世）、溝跡11条（近世1、時期不明10）、土坑65基（中世1、時期不明64）、ピット25か所（時期不明）、校舎基礎跡2か所（近代）である。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に36箱出土している。主な遺物は、土師器（壺・椀・耳皿・高台付皿・甕・瓶）、須恵器（壺・高台付壺・高台付皿・盤・高盤・長頸壺・甕）、灰釉陶器（皿カ）、陶器（碗・皿カ・擂鉢・甕）、磁器（碗・皿）、土師質土器（小皿・擂鉢・内耳鍋）、土製品（土鍤・支脚・紡錘車）、石器（砾石）、鉄製品（釘カ・不明）、ガラス製品（ビン類・オハジキ・石けり）、古錢などである。

第2節 基本層序

P4al区にテストピットを設定し、基本土層（第4図）の堆積状況の観察を行った。土層の観察結果は、以下の通りである。

第1層は暗褐色を呈する現耕作土層で、粘性・縮まりともに普通で、層厚は30~47cmである。

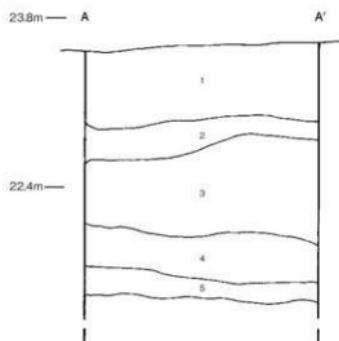
第2層は褐色を呈するソフトローム層で、粘性・縮まりともに強く、層厚は7~19cmである。

第3層は褐色を呈するハードローム層で、粘性・縮まりともに強く、層厚は33~51cmである。

第4層は暗褐色を呈するハードローム層で、粘性・縮まりともに強く、層厚は19~26cmである。第II黑色帯に相当する。

第5層は褐色を呈するハードローム層で、粘性・縮まりともに強く、層厚は8~15cmである。

なお、遺構は第2層上面で確認されている。



第4図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

豊穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 豊穴住居跡

第3022号住居跡（第5～8図）

位置 調査区中央部のP 5g6区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5949・5980号土坑、第217～219号溝、第1・2号ピットに掘り込まれている。第5962・5982号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 西・南側が第217～219号溝に掘り込まれているため、南北軸7.42mで、東西軸は6.60mだけが確認された。主軸方向がN - 3° - Eの方形と推測される。壁高は20～35cmで、ほぼ直立している。

床 ほぼ平坦で、壁際まで硬化面が認められる。壁溝が遺存する壁下に確認されている。

壁 北壁の竈両脇の壁面には、長さ5.5mにわたって、厚さ5cmほどの粘土が貼られており、壁を補強および装飾が目的ものと推測される。

北壁粘土貼り付け部土層解説

1 灰 黄褐色 砂多量

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで164cm、燃焼部幅68cmである。袖部は火床部を構築している埋土面に、ローム土を混ぜ込んだ粘土で構築されている。火床部は地山を7～26cm凹凸に掘り込み、砂や粘土を混ぜ込んだ暗褐色土や褐色土を、床面と同じ高さまで埋め戻して構築されている。火床面は火を受けて赤変化している。煙道部は壁外へ82cm掘り込み、外傾して立ち上がっている壁に粘土を貼り付けて構築されている。

竈土層解説

1	にじい赤褐色	燒土ブロック多量、砂少量
2	褐 灰 色	砂多量、燒土粒子微量
3	褐 色	ロームブロック少量、燒土粒子・砂微量
4	暗 褐 色	ロームブロック微量
5	暗 褐 色	燒土粒子少量
6	黒 褐 色	炭化粒子中量、燒土粒子微量
7	赤 褐 色	燒土粒子微量、炭化粒子少量
8	暗 褐 色	ロームブロック・燒土ブロック少量
9	黒 褐 色	炭化粒子中量、燒土ブロック微量
10	褐 色	燒土ブロック少量
11	灰 黄褐色	燒土粒子・炭化粒子少量
12	暗 褐 色	ロームブロック少量、砂微量

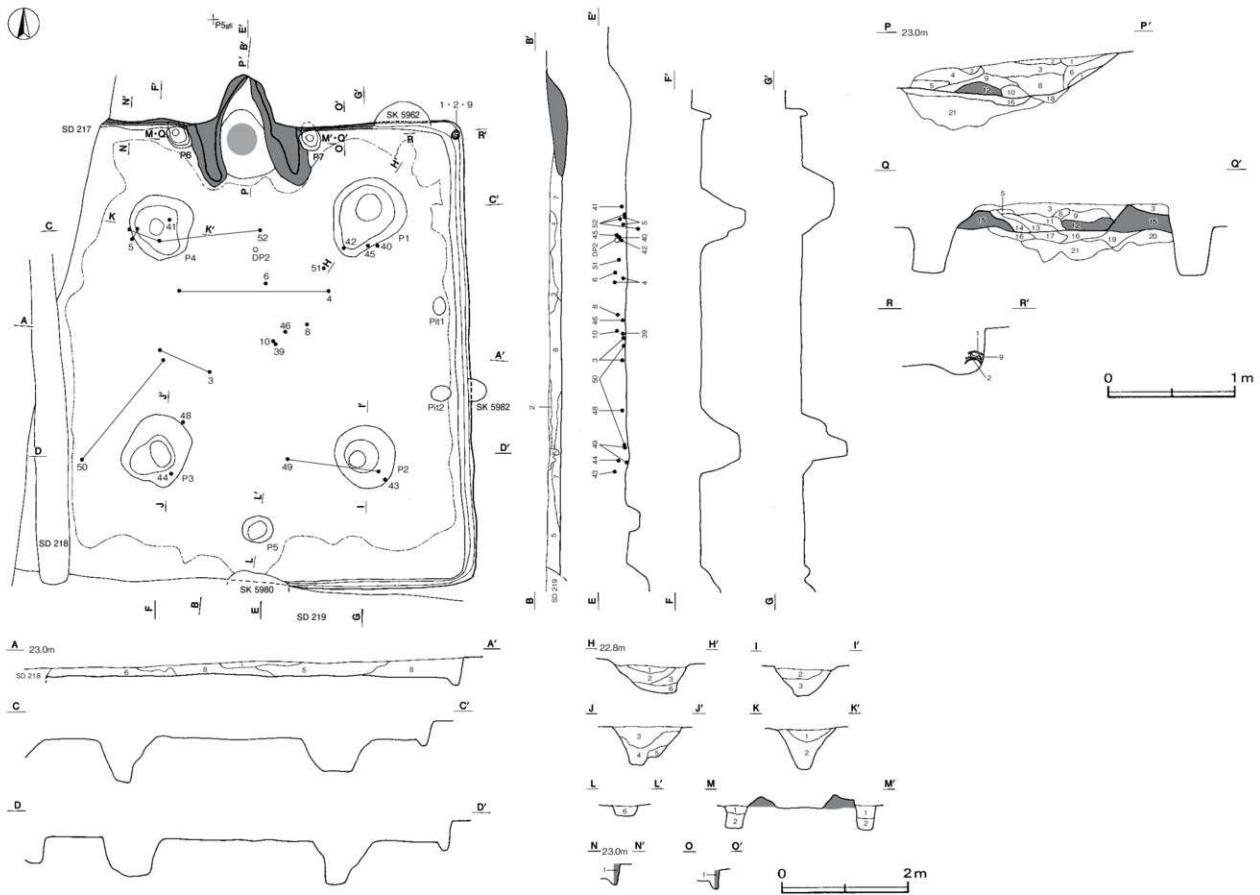
13	にじい赤褐色	燒土ブロック多量、ロームブロック中量
14	暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子少量
15	灰 黄褐色	ロームブロック・砂多量、燒土ブロック・炭化粒子微量
16	暗 褐 色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量
17	暗 褐 色	燒土粒子多量、ロームブロック中量
18	褐 色	ロームブロック中量、燒土粒子少量、炭化粒子微量
19	暗 褐 色	ロームブロック・炭化粒子微量
20	暗 褐 色	ロームブロック中量、燒土粒子微量
21	暗 褐 色	ロームブロック多量

ピット 7か所。P 1～P 4は深さ50～72cmで、規模と位置から主柱穴である。P 5は深さ22cmで、竈と向かい合う南壁の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6・P 7は、深さ39・45cmで、竈両脇に対になって位置していることから、竈もしくは竈周辺にある施設に伴うピットと推測される。

ピット土層解説（各ピット共通）

1	褐 灰 色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量	4	暗 褐 色	ロームブロック多量
2	褐 色	ロームブロック少量	5	褐 色	ロームブロック中量
3	暗 褐 色	ロームブロック中量	6	褐 色	ロームブロック多量

覆土 8層に分層できる。不自然な状況であることから人為堆積である。

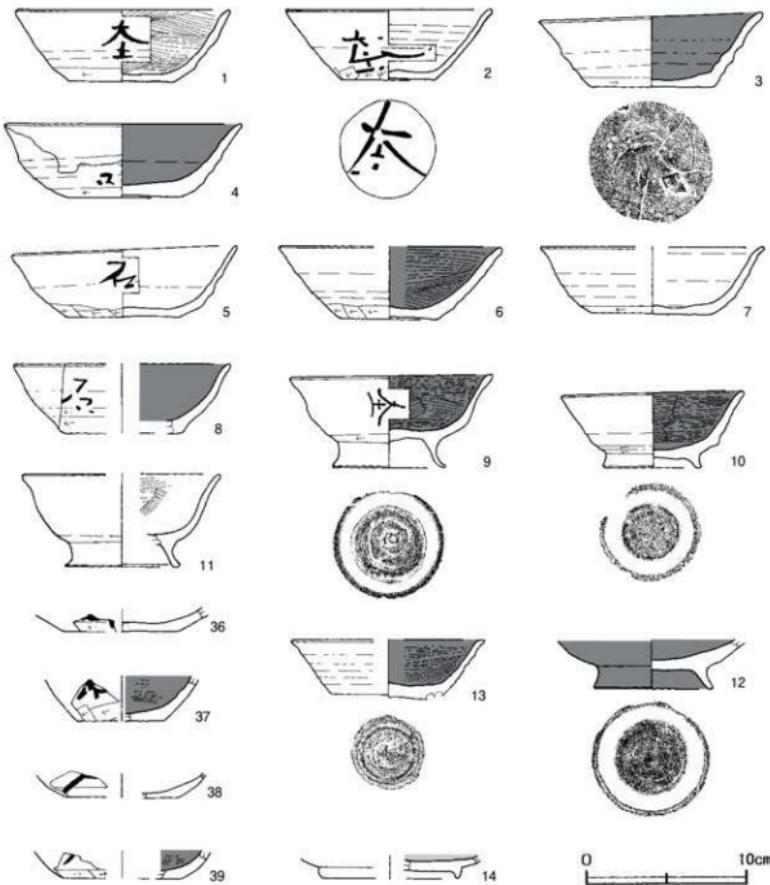


第5図 第3022号住居跡実測図

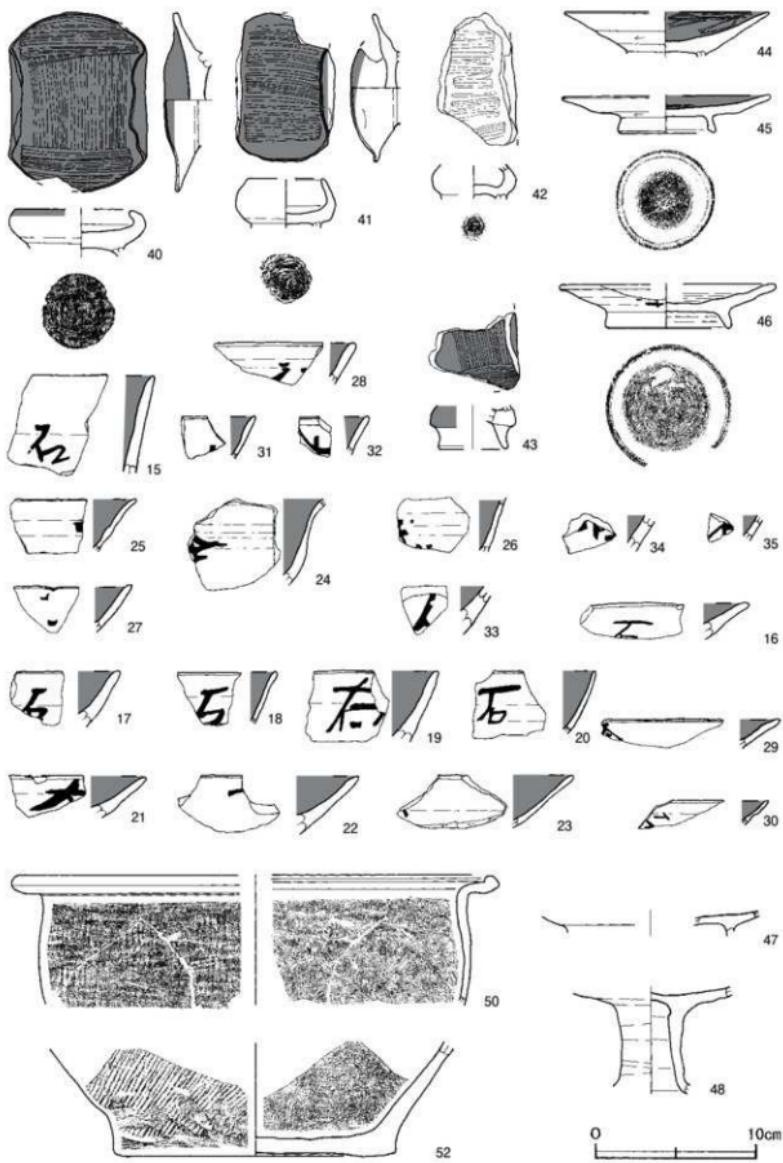
土層解説				
1	暗 褐色	ローム粒子少量、粘土ブロック・炭化粒子微量	5	暗 褐色
2	暗 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	6	褐 色
3	暗 褐色	ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子微量	7	褐 色
4	暗 褐色	ロームブロック、焼土ブロック微量	8	黑 褐色

遺物出土状況 土師器片1486点（坏29、椀54、坏・椀類430、高台付皿6、耳皿4、壺16、瓶5、不明942）、須恵器片434点（坏73、高台付皿1、盤1、高盤1、長頸壺1、壺336、不明21）、灰釉陶器10点（椀1、不明9）、土製品3点（土鍤、支脚、紡錘車）、石器1点（砥石）。鉄滓2点が出土している。また、混入した陶磁器片23点、土師質土器片6点も出土している。遺物の大半は中央部の覆土中から出土しているが、床面と覆土下層から出土した破片が接合したものもある。40~42は覆土下層、43は覆土中層からそれぞれ出土している。1・2・9は北東コーナー部の覆土下層から、逆位で下から2・9・1の順で重なって出土している。

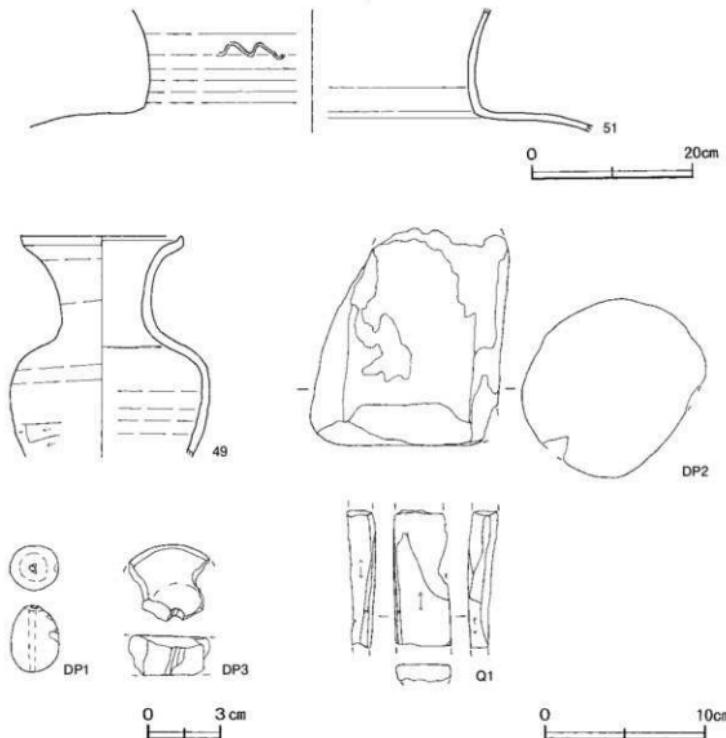
所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第6図 第3022号住居跡出土遺物実測図(1)



第7図 第3022号住居跡出土遺物実測図(2)



第8図 第3022号住居跡出土遺物実測図(3)

第3022号住居跡出土遺物観察表（第6～8図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
1	土師器	环	13.3	4.5	6.6	長石・石英・赤色 粒子・白雲母	橙	普通	外表面クロナデ、下端回転ヘラ削り 内面ヘラ削り 底部ヘラ削り	下層	95% PL1-12 墨書き「大土」
2	土師器	环	12.8	4.4	6.0	長石・石英・赤色 粒子・白雲母	黄橙	普通	内・外表面クロナデ 外表面下端ヘラ削り 底部ヘラ削り	下層	95% PL1-12 墨書き「大土」
3	土師器	环	13.7	4.7	7.6	長石・石英・赤色 粒子・白雲母	橙	普通	内・外表面クロナデ 外表面下端回転ヘラ削り 底部ヘラ削り	下層・床面	95%
4	土師器	环	14.6	4.6	6.8	長石・石英	灰黄	普通	内・外表面クロナデ 外表面下端回転ヘラ削り	下層・中層	95% 墨書き「石子」
5	土師器	环	13.9	4.5	7.8	長石・石英・白雲母	灰白	普通	内・外表面クロナデ 外表面下端ヘラ削り 底部ヘラ削り	下層・床面	60% PL1-12 墨書き「石」
6	土師器	环	[13.6]	4.5	6.0	長石・石英・赤色 粒子	浅黄橙	普通	内・外表面クロナデ 外表面下端ヘラ削り 内面ヘラ削り 底部ヘラ削り	中層	50%
7	土師器	环	[13.8]	4.1	7.4	長石・石英・赤色 粒子・白雲母	灰白	普通	内・外表面クロナデ 外表面下端回転ヘラ削り 底部ヘラ削り	覆土中	35%
8	土師器	环	[13.4]	4.3	[7.5]	長石・石英・赤色 粒子	灰黄	普通	内・外表面クロナデ 外表面下端回転ヘラ削り	中層	20% PL1-12 墨書き「石」
9	土師器	瓶	12.6	5.8	7.0	長石・石英・赤色 粒子・白雲母	黄橙	普通	外表面クロナデ 下端回転ヘラ削り 内面ヘラ削り 底部ナデ	下層	100% PL1-12 墨書き「大土」

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
10	土師器	椀	11.2	4.7	6.0	長石・石英・赤色 粘土	にぶい・褐	普通	外面クロナデ 下端回転ヘラ削り 内面ハラ磨き 底部ナデ	中層	80% PLI
11	土師器	椀	[12.2]	5.7	7.0	長石・石英・赤色 粘土・白雲母	黄澄	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	70%
12	土師器	椀	-	(3.1)	7.3	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ 底部回転ヘラ削り	覆土中	40%
13	土師器	椀	[11.8]	(3.6)	-	長石・石英・赤色 粘土・白雲母	浅黄澄	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き 底部削 除ヘラ削り	覆土中	40%
14	灰陶陶器	皿	-	(1.5)	[8.4]	長石	灰白	良好	内・外面クロナデ 内面オリーブ黄色 の色を施す 刻り出し基台	覆土中	15%
15	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	灰白	普通	外面クロナデ	覆土中	PLI 墨書「石」
16	土師器	高台付皿	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「石」
17	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	PLI覆土中	墨書「石」
18	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい・褐	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「石」
19	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	PLI 墨書「石」
20	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・白雲母	にぶい・褐	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「石」
21	土師器	高台付皿	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ	墨書「大々」	
22	土師器	高台付皿	-	-	-	長石・石英・白雲母	浅黄澄	普通	外面クロナデ	墨書「□」	
23	土師器	高台付皿	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土・白雲母	橙	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
24	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・白雲母	橙	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「大士」
25	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい・褐	普通	外面クロナデ	覆土中	墨書「□」
26	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・白雲母	にぶい・黄澄	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
27	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英	浅黄澄	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
28	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土・白雲母	にぶい・褐	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
29	土師器	高台付皿	-	-	-	長石・石英・白雲母	にぶい・褐	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	PLI 覆土中	墨書「大士」 又は「大士」
30	土師器	高台付皿	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土・白雲母	橙	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
31	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英・赤色 粘土	浅黄澄	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
32	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英	にぶい・黄澄	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「大々」
33	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
34	土師器	环	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	PLI覆土中	墨書「石」
35	土師器	环・椀	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	覆土中	墨書「□」
36	土師器	环	-	(1.5)	[7.0]	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	外面クロナデ 外面下端回転ヘラ 削り 底部削除ヘラ削り	覆土中	5% 墨書「□」
37	土師器	环・椀	-	(2.8)	[5.2]	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	外面クロナデ 下端ヘラ削り 内面ヘ ラ削り 底部ヘラ削り	覆土中	5% 墨書「□」
38	土師器	环	-	(1.5)	[6.8]	長石・石英	浅黄澄	普通	外面クロナデ 底部ヘラ削り	覆土中	5% 墨書「□」
39	土師器	环	-	(1.7)	[7.4]	長石・石英・白雲母	橙	普通	外面クロナデ 下端ヘラ削り 内面ヘ ラ削り 底部ヘラ削り	下層	5% 墨書「□」
40	土師器	耳皿	[7.2]	(2.9)	-	長石・石英	橙	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き 底部削 除ヘラ削り	下層	85%
41	土師器	耳皿	[4.6]	(3.1)	-	長石・石英・赤色 粘土・チャート	橙	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き 底部未 削除	下層	80%
42	土師器	耳皿	-	(2.1)	-	長石・石英・白雲母	浅黄澄	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き 底部削 除ヘラ削り	下層	40%
43	土師器	耳皿	-	(2.7)	[4.2]	長石・石英・赤色 粘土	にぶい・褐	普通	外面クロナデ 内面ヘラ磨き	中層	30%
44	土師器	高台付皿	[12.6]	(2.8)	-	長石・石英・赤色 粘土	にぶい・褐	普通	外面クロナデ 下端回転ヘラ削り 内 面ハラ磨き 底部回転ヘラ削り	中層	70%
45	土師器	高台付皿	[12.8]	2.4	5.9	長石・石英・赤色 粘土	橙	普通	外面クロナデ 下端回転ヘラ削り 内 面ハラ磨き 底部回転ヘラ削り	中層	40%
46	須恵器	高台付皿	[13.2]	2.7	7.8	長石・石英・白雲母	灰白	普通	外面クロナデ 底部回転ヘラ削り	下層	60% PLI 墨書「□」
47	須恵器	盤	-	(2.6)	-	長石・石英・白雲母	灰白	普通	外面クロナデ	覆土中	5%
48	須恵器	高盤	-	(6.6)	-	長石・石英	淡黄	普通	外面クロナデ	下層	10%
49	須恵器	長椭瓶	9.9	-	(13.5)	長石・石英	浅黄澄	普通	面部と体部を接合 内・外面クロナデ 底部下端ヘラ削り	下層・床面	55% PLI
50	須恵器	甕	[29.4]	(8.0)	-	長石・石英・白雲母	灰白	普通	外面格子目叩き後ナデ	下層・床面	20%
51	須恵器	甕	-	(15.1)	-	長石・石英・海綿 骨針	灰白	普通	外面平行印押	中層	10%
52	須恵器	甕	-	(7.0)	17.5	長石・石英	暗灰黃	普通	外面平行印押	下層・PLI覆土 中・底面	5%

番号	器種	長さ	幅・径	厚さ・ 孔径	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DPI	土鍤	2.7	2.0	0.4	8.9	長石・赤色粒子	表面ナデ	覆土中	
DP2	支脚	(13.4)	12.3	11.0	(0.080)	長石・有気・赤色 粘土・有氣・赤色	表面ナデ	中層	
DP3	筋縫車	-	[5.2]	1.6	(14.0)	長石・有気・白雲 粘土	表面ナデ	P4覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴	出土位置	備考
Q1	砥石	(8.4)	3.6	(1.8)	(73.2)	凝灰岩	研磨3面	覆土中	

第3024号住居跡（第9・10図）

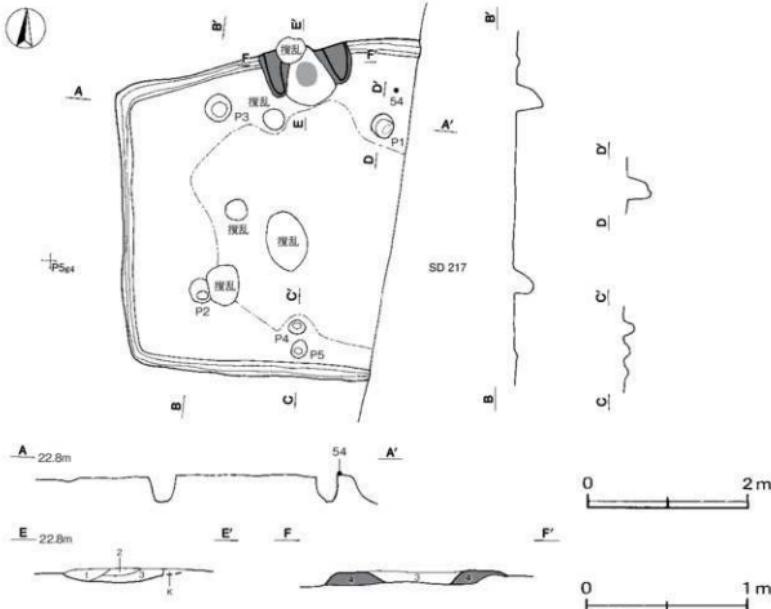
位置 調査区中央部のP 544区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第217号溝に掘り込まれている。

規模と形状 東側が第217号溝に掘り込まれているため、南北軸4.21mで、東西軸は3.70mだけが確認されている。主軸方向がN - 4° - Wの方形もしくは長方形と推測される。壁高は6cmで、立ち上がりは不明瞭である。

床 ほぼ平坦で、中央部に硬化面が認められる。壁溝が遺存する壁下で確認されている。

竈 北壁に付設されている。規模は、擾乱を受けているため、焚口部から煙道部まで60cmだけが確認された。燃焼部幅51cmである。左袖部は床面とほぼ同じ高さの地山面に、右袖部は地山を掘り残して基部としいずれも粘土で構築されている。火床部は床面とほぼ同じ高さで、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は擾乱を受けているため、壁外の掘り込みが不明瞭である。



第9図 第3024号住居跡実測図

遺土層解説

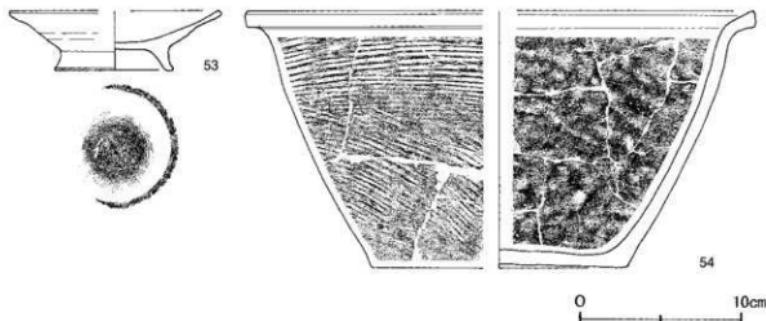
1 帽 黄 色 ローム粒子少量、燒土粒子微量
2 帽 黄 色 ローム粒子・燒土粒子少量

3 帽 黄 色 燒土ブロック中量、ローム粒子微量
4 灰 黄 黄 色 燃土粒子・炭化粒子微量

ピット 5か所。P 1～P 3は深さ28～36cmで、規模と位置から主柱穴である。P 4・P 5は、深さ11・15cmで、竈と向かい合う南壁に対になって位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

遺物出土状況 土師器片62点（坏6、壺3、不明53）、須恵器9点（坏カ3、高台付皿2、高盤1、壺3）が出土している。また、混入した陶器片3点も出土している。土器片は小片がほとんどで、覆土が残っている竈周辺や柱穴内から出土している。54は竈右脇の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。



第10図 第3024号住居跡出土遺物実測図

第3024号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
53	須恵器	高台付皿	[33.0]	3.7	7.4	長石・石英・白雲母	灰白	普通	内・外面クロコナデ 底部回転ヘラ削り	覆土中	50%
54	須恵器	壺	[31.4]	15.8	[15.8]	長石・石英・白雲母	灰黄	普通	外面平行叩き 内面当て具痕	床面	40% PLI

表2 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m)		床面	壁構	内部施設			覆土	主な出土遺物	時 期
				長(東西)軸	短(南北)軸			柱穴数	柱穴(直径)	柱穴(高さ)			
3022	P5g6	N-3°-E	〔方形〕	(6.60) × 7.42	20-25	平頂	無	4	1	2	-	人骨 土師器 須恵器 瓦 陶器 火薬草 鐵石 鐵津	9世紀後葉
3024	P5f4	N-4°-W	〔方形且方屈〕	(3.70) × 4.21	6	平頂	無	3	2	-	-	北進 人骨 土師器 須恵器	9世紀後葉

(2) 掘立柱建物跡

第534号掘立柱建物跡（第11図）

位置 調査区中央部のP 5 d6区、標高23mの台地平坦部に位置している。南に第3022・3024号住居跡が位置している。

重複関係 第5996号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と構造 衍行2間、梁行2間の側柱建物跡で、衍行方向がN-84°-Wの東西棟である。規模は衍行4.2m、

梁行2.4mで、面積は10.08m²である。柱間寸法は桁行が2.1m（7尺）、梁行が1.2m（4尺）を基調とし、柱筋がほぼ揃っている。

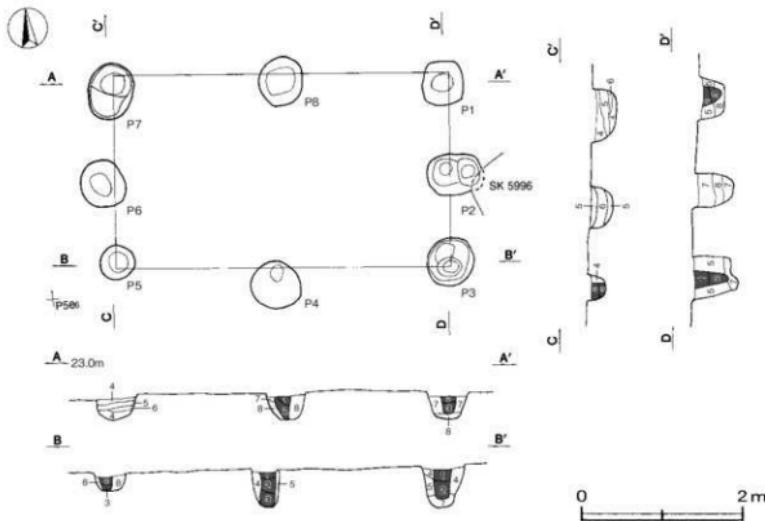
柱穴 8か所。深さ30～58cmである。第1～3層は柱抜き取り痕で、第1層に粘土が多量に含まれている。第4～8層は埋土である。P2・P7には、柱抜き取り穴が確認されている。

土層解説（各ピット共通）

1	褐	色	粘土ブロック多量	5	暗	褐	色	ロームブロック中量
2	黒	色	ロームブロック少量	6	黒	褐	色	ロームブロック多量
3	暗	褐	ローム粒子微量	7	暗	褐	色	ローム粒子中量
4	暗	褐	ローム粒子多量	8	褐	色	ロームブロック多量	

遺物出土状況 土師器41点（坏2、不明39）、須恵器3点（坏カ2、甕1）が出土している。各柱穴の柱抜き取り痕および埋土から出土している。いずれも細片で、図示することができない。

所見 時期は、中世の遺物が出土しておらず、柱穴の掘り方の規模がそれほど小さくないことや柱筋がほぼ揃っていること、また、9世紀後葉の第3022・3024号住居跡などの住居群と隣接し、まとまって位置していることから、それらと同時期のものと考えられる。



第11図 第534号堀立柱建物跡実測図

2 中世の遺構と遺物

地下式坑4基、井戸跡4基、堀跡3条、土坑1基が確認されている。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 地下式坑

第70号地下式坑（第12図）

位置 調査区中央部P6c5区、標高23mの台地平坦部に位置している。

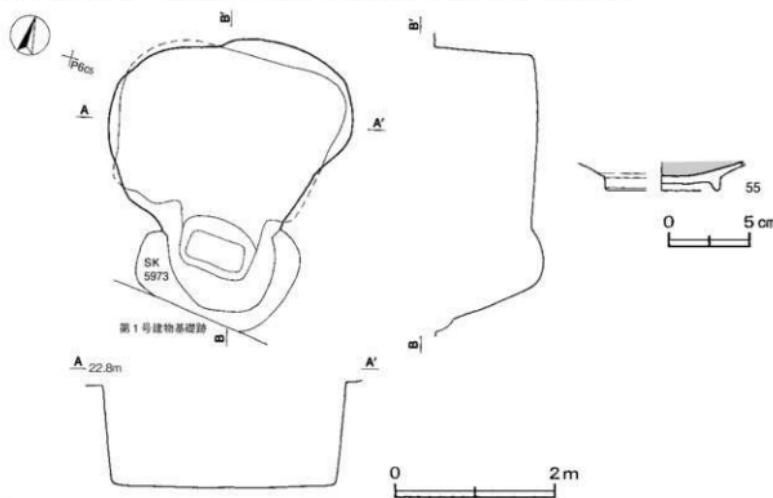
重複関係 第5973号土坑に掘り込まれている。

竪坑 主室南壁の中央部に位置している。上面が第5973号土坑に掘り込まれているため、長径1.30m、短径1.15mだけが確認され、梢円形である。壁高は134cmで、外傾して立ち上がっている。底面は主室の底面から14cm低くなっている。皿状を呈している。

主室 上面は長径3.02m、短径2.17mの不整梢円形で、主軸方向はN-7°-Wである。確認面からの深さは127cmである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立し、一部内傾している。

遺物出土状況 土師質土器片23点（内耳鍋1、擂鉢1、不明21）、陶器片2点（皿か）が出土している。また、流れ込んだ土師器片66点、須恵器片12点も出土している。55は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器が小片のため明確でないが、遺構の形状から中世と考えられる。



第12図 第70号地下式坑・出土遺物実測図

第70号地下式坑出土遺物観察表（第12図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調(釉色)	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
55	陶器	皿か	-	(1.8)	(7.0)	稍良	オリーブ黄 (灰釉)	良好	削り出し高台	覆土中	15%

第71号地下式坑（第13図）

位置 P 6 14区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第72号地下式坑を掘り込んでいる。

竪坑 主室北壁の中央部に位置している。上面は長軸1.55m、短軸1.22mの隅丸長方形である。壁高は144cmで、ほぼ直立している。底面は主室の底面から11cm低くなっている。底面はほぼ平坦である。

主室 上面は長軸3.30m、短軸1.94mの隅丸長方形で、主軸方向はN-4°-Wである。確認面からの深さは134cmである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立している。

覆土 8層に分層できる。第7・8層は地山のローム土であり、天井部の崩落土と考えられる。第6層はロー

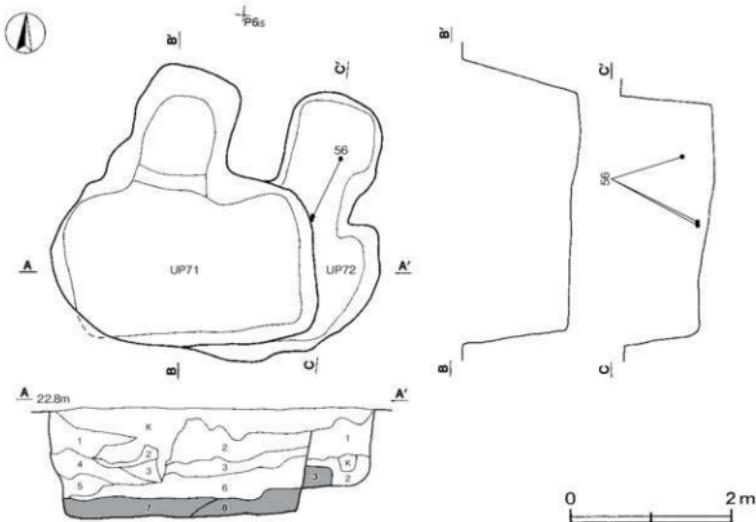
ムブロックを多く含んでいることから人為堆積、第1～4層は自然堆積である。

土層解説

1 暗 関 色 ローム粒子・炭化粒子微量	5 関 色 ローム粒子中量
2 明 関 色 ロームブロック少量	6 黒 関 色 ロームブロック多量
3 黒 関 色 ロームブロック少量	7 関 色 赤色粒子微量(天井部の崩落土)
4 黒 関 色 ロームブロック・炭化粒子微量	8 明 関 色 赤色粒子少量(天井部の崩落土)

遺物出土状況 流れ込んだ土師器片19点が出土している。

所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため明確でないが、遺構の形状から中世と考えられる。



第13図 第71・72号地下式坑実測図

第72号地下式坑（第13・14図）

位置 調査区中央部P 6 i5区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第71号地下式坑に掘り込まれている。

堅坑 主室北壁の東部に位置している。上面は長軸157m、短軸1.18mの隅丸長方形である。壁高は113cmで、ほぼ直立している。底面は主室の底面から緩やかに傾斜して18cm低くなっている。底面はほぼ平坦である。

主室 上面は南北軸1.64mで、東西軸は2.32mだけが確認されており、主軸方向がN-5°-Eの不整長方形と推測される。確認面からの深さは95cmである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立している。

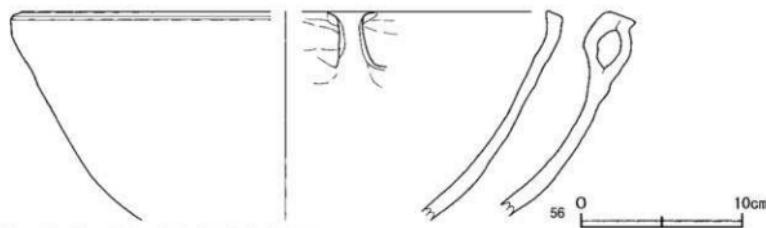
覆土 3層に分層できる。第3層はローム土であり、天井部の崩落土と考えられる。第1・2層はロームブロックを多く含んでいることから人為堆積である。

土層解説

1 暗 関 色 ロームブロック多量	3 関 色 赤色粒子微量(天井部の崩落土)
2 関 色 ロームブロック中量	

遺物出土状況 土師質土器片13点(内耳鍋1、擂鉢5、不明7)が出土している。また、混入した土師器片285点、須恵器片125点、鐵滓1点も出土している。56は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器が小片のため明確でないが、遺構の形状から中世と考えられる。



第14図 第72号地下式坑出土遺物実測図

第72号地下式坑出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
56	土加賀土器	内耳飾	[33.4]	(12.9)	-	長石・石英・赤色 粒子・黒雲母	褐	普通	内・外面ナデ	下層	30%

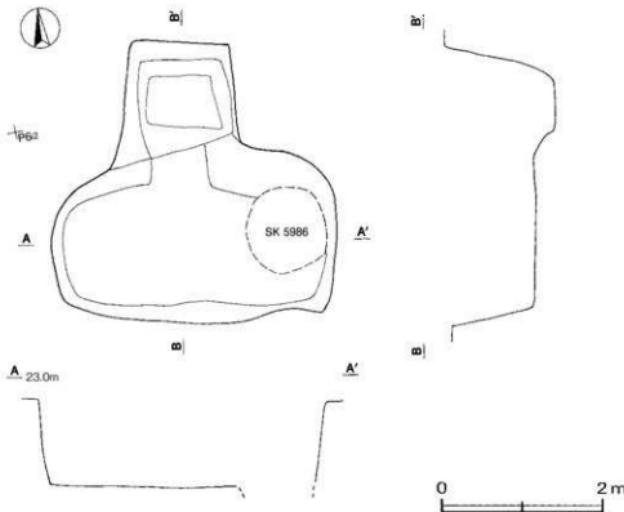
第73号地下式坑（第15・16図）

位置 調査区中央部のP 612区。標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5986号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

豊坑 主室北壁の中央部に位置している。上面は長軸1.45m、短軸1.33mの方形である。壁高は138cmで、外傾して立ち上がっている。底面は主室の底面から27cm低くなっている。底面はほぼ平坦である。

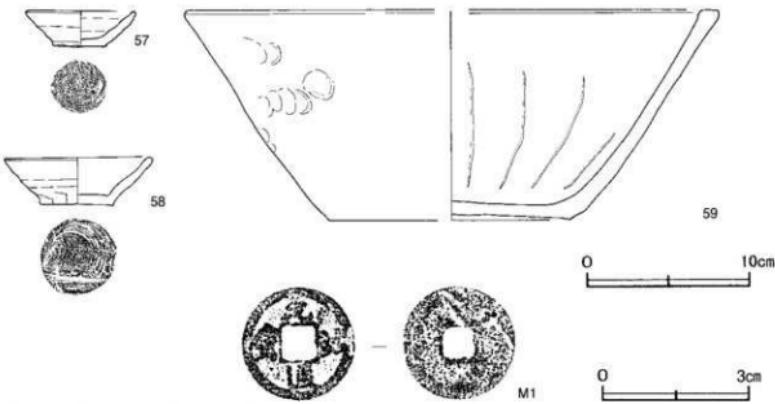
主室 上面は長径3.57m、短径2.04mの楕円形で、主軸方向はN-10°-Eである。確認面からの深さは106cmである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直立している。



第15図 第73号地下式坑実測図

遺物出土状況 土師質土器片18点（小皿2、内耳鍋8、擂鉢8）、古銭1点（元□通寶）が出土している。また、流れ込んだ土師器片19点、須恵器片6点も出土している。57～59・M1は覆土中から出土している。

所見 時期は、遺物の出土位置が不明であることから明確にできないが、16世紀前半には埋没していたものと考えられる。



第16図 第73号地下式坑出土遺物実測図

第73号地下式坑出土遺物観察表（第16図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
57	土師質土器	小皿	6.7	2.2	3.4	長石・有英・赤色 砂子・黒雲母	橙	普通	ロクロ成形 底部斜軸系切り	覆土中	95%
58	土師質土器	小皿	9.1	3.0	4.4	赤色粒子・黒雲母	にじいろ 黄橙	普通	ロクロ成形 底部斜軸系切り	覆土中	90% PLII
59	土師質土器	擂鉢	[30.6]	13.0	[14.8]	赤色粒子・黒雲母	灰褐色	普通	内・外面ナデ 外面指頭押圧	覆土中	40%

番号	銭名	徑	孔徑	厚さ	重量	初銘年	特徴	出土位置	備考
M1	元□通寶	2.3	0.7	0.1	3.0	-	行書	覆土中	

表3 地下式坑一覧表

番号	位置	主軸方向	規 模						覆土	主な出土遺物	時 期		
			堅 穴		主 室		確認面 からの深 さ (cm)	天井部 の高さ (cm)					
長軸(径) ×短軸(径) (m)	壁高 (cm)	平面形	底面	長軸(径) ×短軸(径) (m)	平面形								
70	P6c5	N-7°-W	(1.20) × (1.15)	134	椭円形	圓錐	3.02 × 2.17	127	不整 椭円形 偏丸 長方形	-	-	土師質土器 陶器	中世
71	P6d4	N-4°-W	1.55 × 1.22	144	椭丸 長方形	平頂	3.30 × 1.94	134	不整 椭円形 偏丸 長方形	-	自・人	-	中世
72	P6e5	N-5°-E	1.57 × 1.18	113	椭丸 長方形	平頂	1.64 × (2.32)	95	(不整長方形)	-	人為	土師質土器	中世
73	P6d2	N-10°-E	1.45 × 1.33	138	方形	平頂	3.57 × 2.04	106	椭円形	-	-	土師質土器 古銭(元□通寶)	16世紀前半

(2) 井戸跡

第134号井戸跡（第17図）

位置 調査区中央部のP 5 g3区。標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第95号堀跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径3.05m、短径2.50mの楕円形で、長径方向はN~90°である。深さ180cmほど掘り下げた時点で、湧水のため下部の調査を断念した。形状は壁の立ち上がりから、漏斗状と考えられる。

覆土 10層に分層できる。第9・10層はロームブロックを多く含んでいることから人為堆積、第1~8層は周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

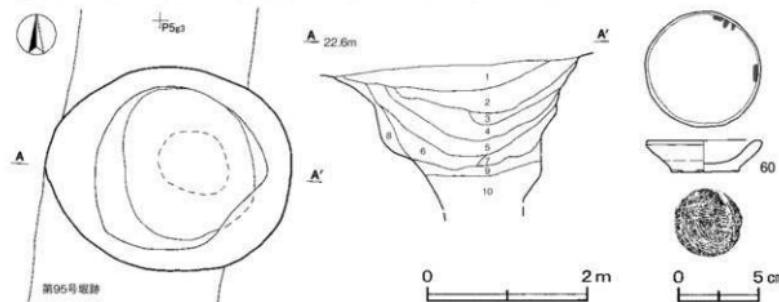
土層解説

1	褐	色	ロームブロック・粘土ブロック微量	6	暗	褐	色	ローム粒子少量、粘土粒子微量
2	褐	色	ロームブロック微量	7	褐	色	ローム粒子少量	炭化粒子微量
3	暗	褐	ロームブロック少量	8	褐	色	ローム粒子多量、炭化粒子微量	
4	褐	色	ローム粒子中量	9	暗	褐	色	ロームブロック中量
5	暗	褐	ローム粒子中量	10	褐	色	ロームブロック多量、炭化粒子微量	

遺物出土状況 土師質土器片1点（小皿）が出土している。また、流れ込んだ土師器片1点も出土している。

60は覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土土器から16世紀後半には埋没していたものと考えられる。



第17図 第134号井戸跡・出土遺物実測図

第134号井戸跡出土遺物観察表（第17図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
60	土師質土器	小皿	6.9	1.9	4.3	長石・石英・黒鐵 母・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロ成形 瓦部回転糸切り	覆土中	100% PL11

第135号井戸跡（第18図）

位置 調査区中央部のP 4 g8区、標高22mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径3.10mの円形である。深さ180cmほど掘り下げた時点で、湧水のため下部の調査を断念した。形状は壁の立ち上がりから、漏斗状と考えられる。

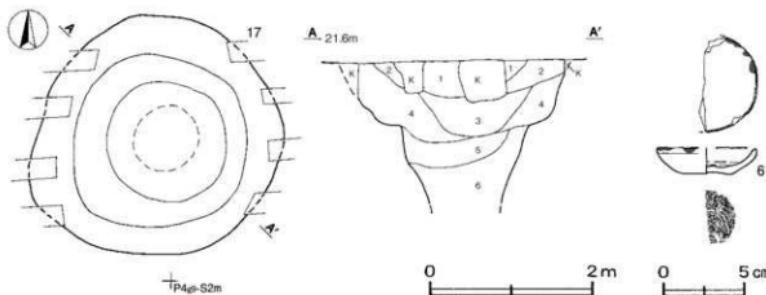
覆土 6層に分層できる。第5・6層はロームブロックや粘土ブロックを多く含んでいることから人為堆積、第1~4層は周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

1	暗	褐	色	ローム粒子微量	4	褐	色	ローム粒子微量
2	褐	色	ロームブロック微量	5	暗	褐	色	ロームブロック・粘土ブロック中量
3	暗	褐	色	ローム粒子・粘土粒子微量	6	褐	色	ロームブロック多量

遺物出土状況 土師質土器片17点（小皿5、不明12）、石製品1点（五輪塔カ）が出土している。また、流れ込んだ土師器片9点、須恵器片7点も出土している。61は覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土土器から16世紀後半には埋没していたものと考えられる。



第18図 第135号井戸跡・出土遺物実測図

第135号井戸跡出土遺物観察表（第18図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
61	土師質土器	小皿	[6.0]	1.6	3.2	長石・石英・赤色 粘土	黄	普通	ロクロ成形 底部削鉗糸切り	覆土中	45%

第136号井戸跡（第19図）

位置 調査区南部のQ 4 a5区、標高22mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第23・24号ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 径1.04mの円形である。深さ100cmほど掘り下げた時点で、湧水のため下部の調査を断念した。

形状は壁の立ち上がりから、円筒状と考えられる。

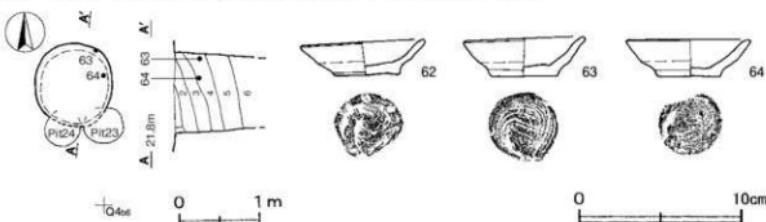
覆土 6層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子少量、燒土粒子・粘土粒子微量	4 黒褐色	ロームブロック・燒土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子微量
3 黄褐色	ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子・粘土粒子微量	6 暗褐色	ローム粒子中量

遺物出土状況 土師質土器片5点（小皿）が出土している。また、流れ込んだ土師器片12点、須恵器片1点も出土している。63・64は壁際の覆土上層、62は覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土土器から16世紀前半には埋没していたものと考えられる。



第19図 第136号井戸跡・出土遺物実測図

第136号井戸跡出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
62	土師質土器	小皿	7.6	2.3	4.2	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中	90%
63	土師質土器	小皿	7.2	2.5	4.1	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	上層	75% PL11
64	土師質土器	小皿	7.6	2.3	3.9	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	上層	75% PL11

第137号井戸跡（第20図）

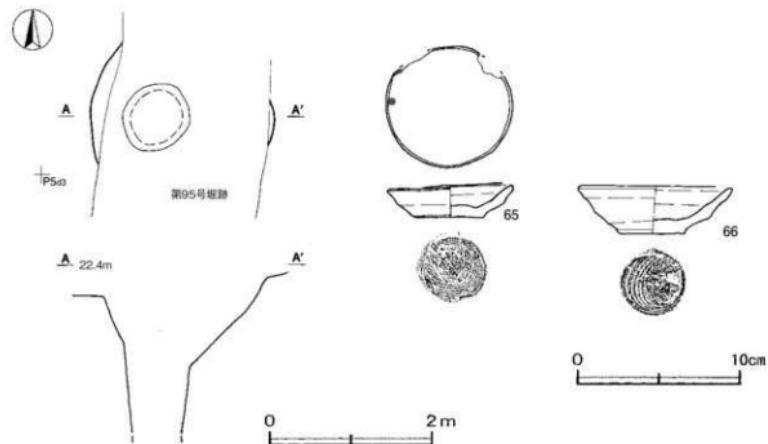
位置 調査区中央部のP 5c3区、標高22mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第95号堀に掘り込まれている。

規模と形状 確認面から100cmほどの深さまで第95号堀に大部分が掘り込まれているため、堀の底面で径0.90mの円形の掘り込みが確認されただけである。堀の底面から深さ100cmほど掘り下げた時点で、湧水のため下部の調査を断念した。確認された形状は、円筒状である。

遺物出土状況 土師質土器片23点（小皿5、内耳鍋17、擂鉢1）、陶器16点（壺）、石製品1点（五輪塔カ）が出土している。65・66は覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土土器から15世紀後半には埋没していたものと考えられる。



第20図 第137号井戸跡・出土遺物実測図

第137号井戸跡出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
65	土師質土器	小皿	7.7	2.2	4.0	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中	100% PL11
66	土師質土器	小皿	9.1	3.0	4.1	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中	95% PL11

表4 井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m)		断面形	底面	覆土	主な出土遺物	時期
				長径×短径	深さ(cm)					
134	P 5 g3	N - 90°	楕円形	3.05 × 2.50	(180)	漏斗状	-	自然・人	土師質土器	16世紀後半
135	P 4 g8	-	円形	3.10 × 3.10	(180)	漏斗状	-	自然・人	土師質土器・五輪塔ヶ	16世紀後半
136	Q 4 a5	-	円形	1.01 × 1.04	(100)	円錐状	-	自然	土師質土器	16世紀前半
137	P 5 e3	-	円形	(0.90) × (0.90)	(100)	円錐状	-	-	土師質土器・陶器・五輪塔ヶ	15世紀後半

(3) 堀跡

第95号堀跡 (第21・22図)

位置 調査区中央部のO 5 j3区～P 5 h3区、標高22～23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第137号井戸跡、第96号堀跡を掘り込み、第134号井戸に掘り込まれている。第5981号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 確認された長さは32mほどで、北方向(N - 7° - E)へ直線的に延び、北端は調査区域外に至っており、南端はP 5 h3区で擾乱を受けている。上幅1.9～3.3m、下幅0.3～0.6m、深さ100cmである。断面形はU字形で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 A-A' と B-B' は5層に分層できる。A-A' と B-B' の第4層は、ロームブロックを多く含んでいることから人為堆積、それ以外の層は自然堆積である。

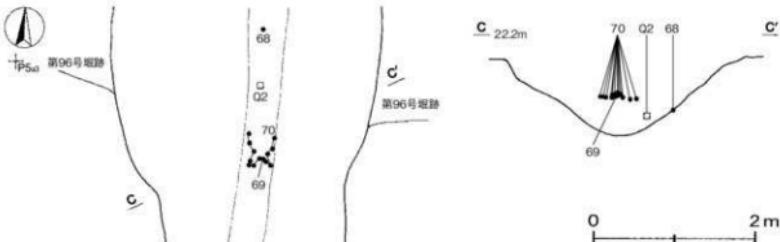
土層解説 (A-A')

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 黒 開 色 ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 4 細 開 色 ロームブロック中量、炭化粒子微量 |
| 2 黒 開 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 細 開 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 3 黒 開 色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | |

土層解説 (B-B')

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1 暗 開 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒 開 色 ロームブロック中量 |
| 2 黒 開 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗 開 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗 開 色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 | |

遺物出土状況 土師質土器片136点(小皿11、内耳鍋5、擂鉢12、壺1、不明107)、陶器片2点(天目茶碗)、石器6点(砥石2、石臼4)、石製品17点(五輪塔2、五輪塔ヶ15)、鐵製品1点(不明)が出土している。また、流れ込んだ土師器片109点、須恵器片23点も出土している。遺物はすべて覆土中から出土している。五輪塔や花崗岩片がP 5 a3区に集中している。68・Q 2は中央部の覆土下層、69・70は覆土中層から出土している。



第21図 第95号堀跡遺物出土状況図

所見 時期は、出土土器と15世紀後半の第137号井戸跡、第96号堀跡と16世紀後半の第134号井戸との重複関係から、16世紀前半と考えられる。『茨城県教育財團文化財調査報告第280集』で出土土器から16世紀前半と報告されている第95号堀跡が、本跡の延長線上に南北方向に延びている。擾乱を受けているため明確でないが、延長線上に方向をほぼ同じくしていることや年代が一致することから同一のものと推測される。長さ150mほどでさらに北側が調査区域外に至っており、底面の高低差は今回報告部分が90cmほど低いことが確認された。性格は妙徳寺の参道の側溝と報告されている。

第95号堀跡出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調(釉薬)	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
68	土師質土器	小瓶	9.0	2.8	4.0	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	クロコ成形 底部回転糸切り	下層	100% PLII
69	陶器	天目茶碗	12.2	5.8	4.6	精良	青褐色 (黄褐色) 赤灰(薪焼)	良好	削り出し高台	中層	95%
70	土師質土器	甕	19.7	26.0	18.3	長石・透明粒子・白雲母	にぶい橙	普通	外面ナデ 内面上半楕ナデ 下半ナデ	中層	80%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (kg)	石 質	特 徴	出土位置	備 考
Q2	五輪塔	(29.0)	19.8	19.2	(1.6)	花崗岩	空・風輪	下層	

第96号堀跡（第22図）

位置 調査区北部のP 4区から調査区東部のQ 6区、にかけての標高22~23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第95号堀・216~218号溝、第5975号土坑、第1号建物基礎に掘り込まれている。第133号井戸跡、第211号溝跡、第5965・5969号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 『茨城県教育財團文化財調査報告第280集』で報告されているP 4 10区~Q 5 d5区に位置している堀跡の北半部にある。南東部と北西部は調査区域外であるが、南北軸57m、東西軸55mほどで南北軸方向N~7°-Wの方に巡る堀と推測される。堀の規模は、上幅1.58~3.24m、下幅0.18~0.36m、深さ104~176cmで、断面形は薬研状である。底面の標高は、『第280集』で南西コーナー部が低くなっていると報告されているが、それ以外では高低差がみられない。

覆土 A-A'は5層、B-B'は8層、C-C'とD-D'は7層、E-E'は9層に分層できる。A-A'の第4層、B-B'の第3・5・6層、E-E'の第1・2・4・5・8層はレンズ状に堆積をしているが、ロームブロックを多く含んでいることから人為堆積で、それ以外の層は自然堆積である。

土層解説（A-A'）

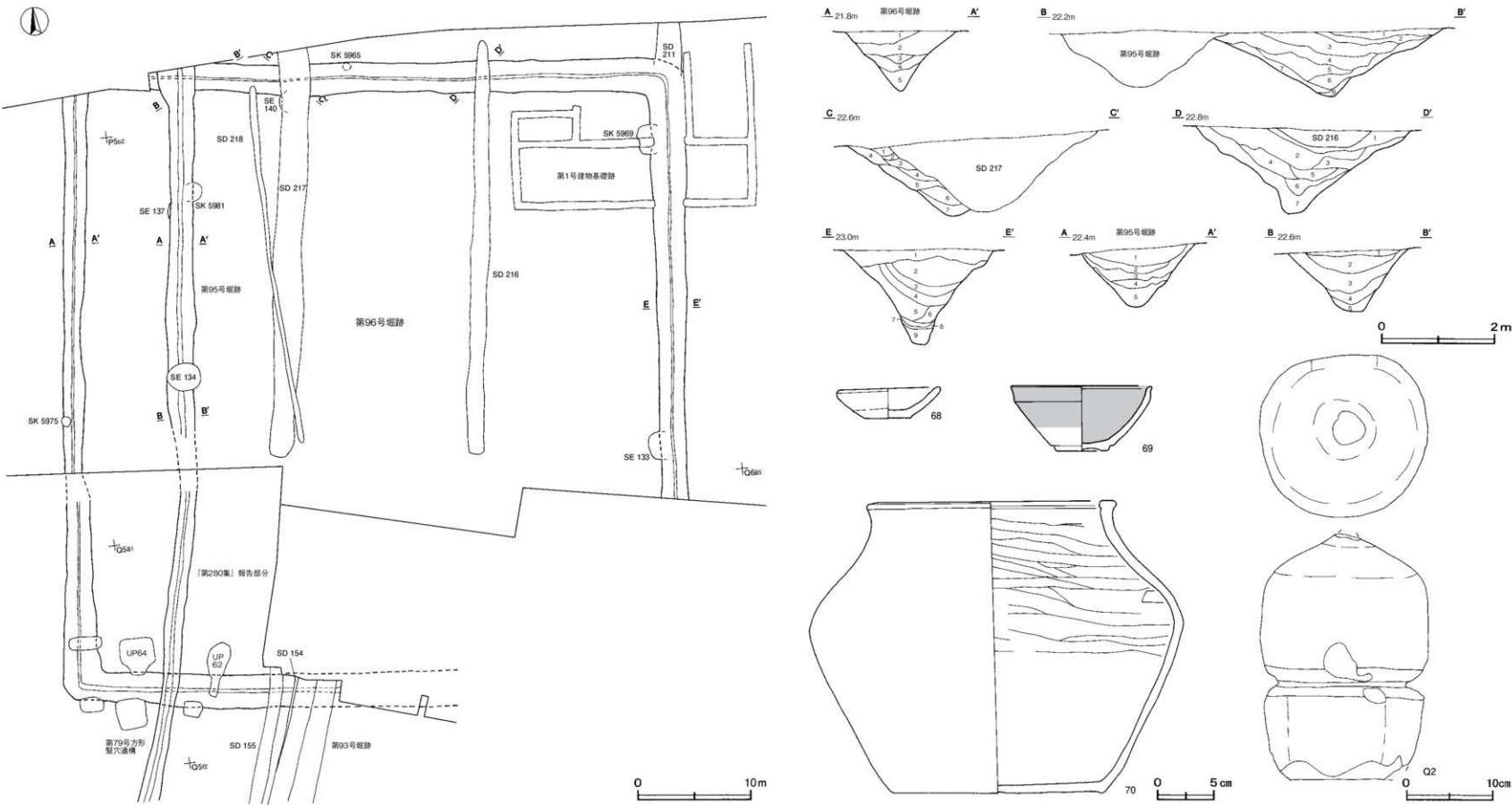
- | | | | |
|---------|-----------------------|---------|-----------|
| 1 黒 開 色 | ローム粒子少量、燒土粒子・粘土粒子微量 | 4 開 開 色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒 開 色 | ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒 開 色 | ロームブロック微量 |
| 3 黒 一 色 | ロームブロック少量 | | |

土層解説（B-B'）

- | | | | |
|---------|----------------------------|---------|------------------|
| 1 黒 開 色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 5 開 開 色 | ロームブロック中量、燒土粒子微量 |
| 2 黒 開 色 | ロームブロック・粘土粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量 | 6 開 開 色 | ロームブロック多量 |
| 3 墓 開 色 | ロームブロック中量 | 7 黒 開 色 | ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 黒 開 色 | ローム粒子中量、燒土粒子微量 | 8 開 開 色 | ロームブロック少量、燒土粒子微量 |

土層解説（C-C'）

- | | | | |
|---------|-------------------|---------|-------------------------|
| 1 墓 開 色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒 開 色 | 燒土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒 開 色 | ローム粒子・燒土粒子・炭化粒子微量 | 6 墓 開 色 | ロームブロック・燒土粒子少量 |
| 3 黒 開 色 | 燒土粒子微量 | 7 黒 開 色 | ロームブロック・燒土ブロック少量、炭化粒子微量 |
| 4 墓 開 色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |



第22図 第95・96号堀跡実測図、第95号堀跡出土遺物実測図

土層解説 (D-D')

1 暗褐色	燒土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子少量・燒土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・粘土ブロック少量	6 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック少量	7 暗褐色	ロームブロック・焼土粒子少量
4 黒褐色	粘土粒子少量		

土層解説 (E-E')

1 暗褐色	ロームブロック中量・炭化粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子少量
2 褐色	ロームブロック多量	7 暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ロームブロック微量	8 暗褐色	ロームブロック多量・炭化粒子微量
4 褐色	ロームブロック中量・燒土粒子・炭化粒子微量	9 暗褐色	ローム粒子中量・燒土粒子・炭化粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック多量・炭化粒子少量		

遺物出土状況 土師質土器片224点（小皿116、内耳鍋106、擂鉢2）、陶器片9点（縁4、不明5）が出土している。また、流れ込んだ土師器片244点、須恵器片106点と混入した磁器片2点、瓦質土器片15点も出土している。これらの遺物はすべて覆土中からの出土である。小片で摩滅しているものがほとんどであり、図示することができない。

所見 時期は、今回調査した部分から出土した土器では明確にできないが、「第280集」で出土土器から15世紀後半と報告されている。本跡を掘り込んでいる第95号堀が16世紀前半と考えられるため、重複関係とも一致する。形状から半円四方の方形区画と推測できるが出入り口部は不明である。南東部が調査区域外であり、その位置に土橋状の出入り口部が存在していた可能性もある。「第280集」では妙慈寺との関連が指摘されている。今回の調査で区画内部から確認された同時期の遺構は、第137号井戸跡だけがあり堀と同時期の建物跡が確認されていないため、内部の施設等については不明である。

第98号堀跡（第23図）

位置 調査区分南西部のQ 4 b2区、標高21mの台地平坦部に位置している。

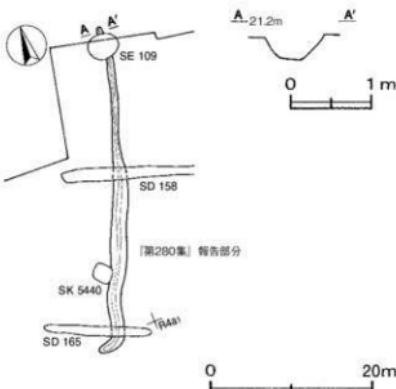
重複関係 第109号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 調査区域で確認され、また第109号井戸に掘り込まれているため長さ0.75mだけが確認された。上幅0.80m、下幅0.40m、深さ29cmである。

断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がりっている。「茨城県教育財團文化財調査報告第280集」で報告されている堀の北端と考えられ、全体で北方向（N=18°-E）に38mほど延び、R 3 a9区で西に屈曲し止まっていることが確認され、底面の高低差はみられない。

遺物出土状況 土師質土器片1点（不明）、石器1点（砥石カ）が出土している。また、流れ込んだ土師器片8点も出土している。いずれも細片で、図示することができない。

所見 時期は、今回調査した部分から出土した土器では明確にできないが、「第280集」で出土土器から16世紀後半と報告されている。



第23図 第98号堀跡実測図

表5 堀跡一覧表

番号	位置	走行方向	形状	要 準				覆土	断面形	主な出土遺物	時 期
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
95	O53 ~ P53	N - 7° - E	直線状	(150)	1.90 ~ 3.30	0.3 ~ 0.6	100	自・人	U字状	土師質土器 両器 瓦輪器	16世紀前半
96	P4 ~ Q6 [N - 7° - W]	[方形]	東西軸55 南北軸57	1.58 ~ 3.24	0.18 ~ 0.36	104 ~ 176	自・人	素研状	土師質土器 両器	15世紀後半	
98	QH2	N - 18° - E	直線屈曲	38	0.80	0.40	29	-	逆台形状	土師質土器 砥石	16世紀後半

(4) 土坑

第5977号土坑（第24図）

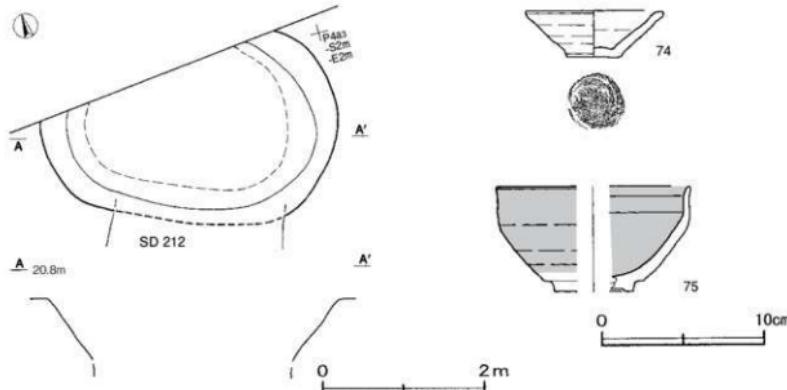
位置 調査区北西部のP 4 a3区、標高20mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第212号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 北側が調査区域外に延びてることで南側が第212号溝跡と重複していることから、東西径は3.60m、南北径は1.80mだけが確認され、長径方向N - 28° - Wの楕円形と推測される。深さは78cmまで確認されており、底面までの深さは不明である。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

遺物出土状況 土師質土器片12点（小皿6、内耳鍋6）、陶器1点（天目茶碗）が出土している。また、流れ込んだ土師器片1点、須恵器片1点も出土している。74・75は覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土土器から16世紀前半には埋没していたものと考えられる。また、確認された深さから土坑として扱ったが、井戸跡の可能性もある。



第24図 第5977号土坑・出土遺物実測図

第5977号 土坑出土遺物観察表（第24図）

番号	種別	口径	口徑	器高	底径	胎 土	色調(釉薬)	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
74	土師質土器	小皿	8.4	2.8	3.4	灰白・黒質母・赤 色粒子	浅黄橙	普通	ロクロ成形 底部回転系切り	覆土中	100% PLLI
75	陶器	天目茶碗	[11.7]	6.5	[48]	精良	黒褐(鉄褐色)	良好	削り出し高台	覆土中	25%

3 近世の造構と遺物

溝跡1条が確認されている。以下、造構と遺物について記述する。

溝跡

第152号溝跡（第25図）

位置 調査区東部のP 6 a8区～Q 6 b6区、標高23mの台地平坦部に位置している。調査区域外を挟んで南側に『茨城県教育財團文化財調査報告第280集』で報告された部分が位置している。

重複関係 第5963・5964号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 確認された長さは44mほどで、北方向（N = 6° - E）へ直線的に延び、両端ともに調査区域外に至っている。上幅1.50～2.20m、下幅0.10～0.20m、深さ150～170cmである。底面の高低差はみられない。断面形は薺研状で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 A-A'は5層、B-B'は6層に分層できる。

B-B'の第4層はロームブロックが多く含んでいることから人為堆積で、それ以外の層は自然堆積である。

土層解説（A-A'）

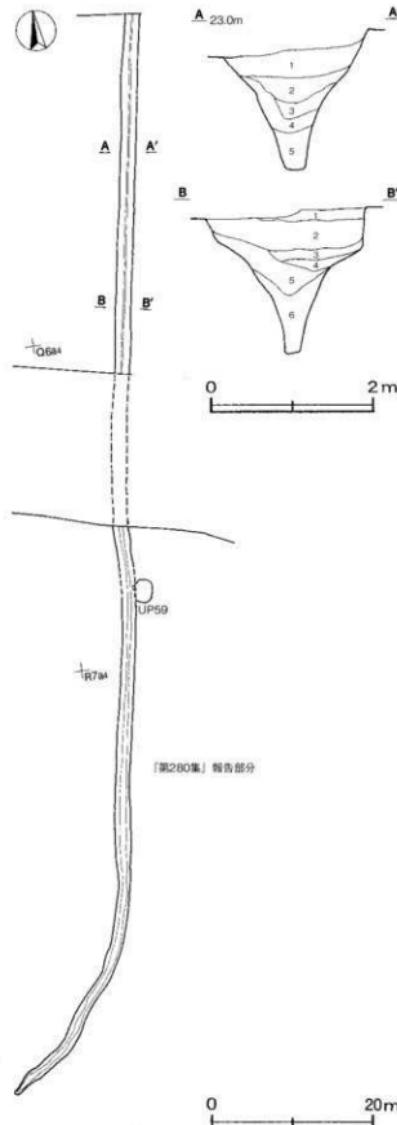
- 1 黒褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・燒土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量

土層解説（B-B'）

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、燒土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量
- 6 極暗褐色 ローム粒子中量、粘土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片6点（内耳鍋）、陶器片1点（甕）、鐵滓1点が出土している。また、流れ込んだ繩文土器片1点、土師器片57点、須恵器片37点も出土している。遺物はすべて覆土中から出土している。いずれも細片で、図示することができない。

所見 『第280集』で17世紀前半と報告されている第152号溝跡が、調査区域外を挟んで本跡の南側延長線上に南北方向に延びている。未調査部分があるため明確でないが、方向をほぼ同じくしていることから、同一の溝跡と推測される。長さ140mほどでさらに北側が調査区域外に至っており、底面の比高差は今回の報告部分が100cmほど低いことが確認された。



第25図 第152号溝跡実測図

4 近代の遺構と遺物

校舎の基礎跡が2か所確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

校舎基礎跡

第1・2号建物基礎跡（第3・26・27図）

位置 調査区東部のP 5～P 6区、標高22～23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3025号住居跡、第96号堀跡、第216・219号溝跡、第5969・5973・5995号土坑を掘り込んでいる。

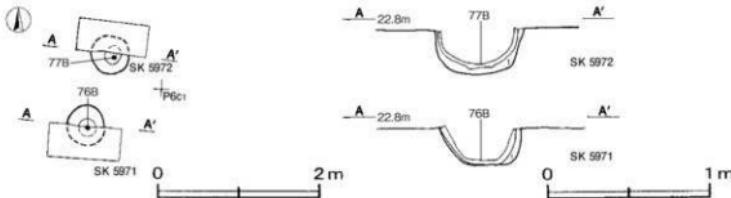
規模と形状 基礎跡は幅0.5～0.8mの溝状の掘り方で、掘り方内部には小砂利を混ぜ込んだ土砂が詰められている。第1号建物基礎跡の主屋は東西軸22m、南北軸6m、面積132m²の長方形で、長軸方向N-81°-Wの東西棟である。北側に幅6mの間隔で平行に延びる長さ8mの基礎跡が2条あり、建物全体としてはL字形であったとみられる。また、北西部に東西軸6m、南北軸3m、面積18m²の長方形に巡っている基礎跡が付属している。東西棟の中央部には、一辻0.6～0.7mの方形の基礎跡が2か所、北側に1か所主屋と直交して並んでいる。第2号建物基礎跡は南側が調査区域外に延びているため、主屋は東西軸7m、南北軸は22mだけが確認され、長軸方向N-4°-Eの南北棟である。主屋のやや北側に内部を区切っている基礎跡がある。また、北側に幅7mの間隔で北側へ延びる長さ4mの基礎跡と、9m北側へ延びて東に90度屈曲して更に11m延びる基礎跡があり、建物全体としてはL字形とみられる。主屋の西側には一辻0.6～0.7mの方形の基礎跡が9か所、主屋に平行に並んでいる。2棟の建物基礎跡は重複しており、1号建物基礎跡が新しいとみられるが、詳細は不明である。

付属施設 建物基礎跡のほかに、第1号建物基礎跡の北西部、P 5c0区に第5971・5972号の2基の土坑が位置している。径0.5m、深さ24～27cmの円形の土坑で、南北に並んでいる。土坑内部に76・77が正位で埋設され、ローム土を含んでいる暗槻上を埋土している。

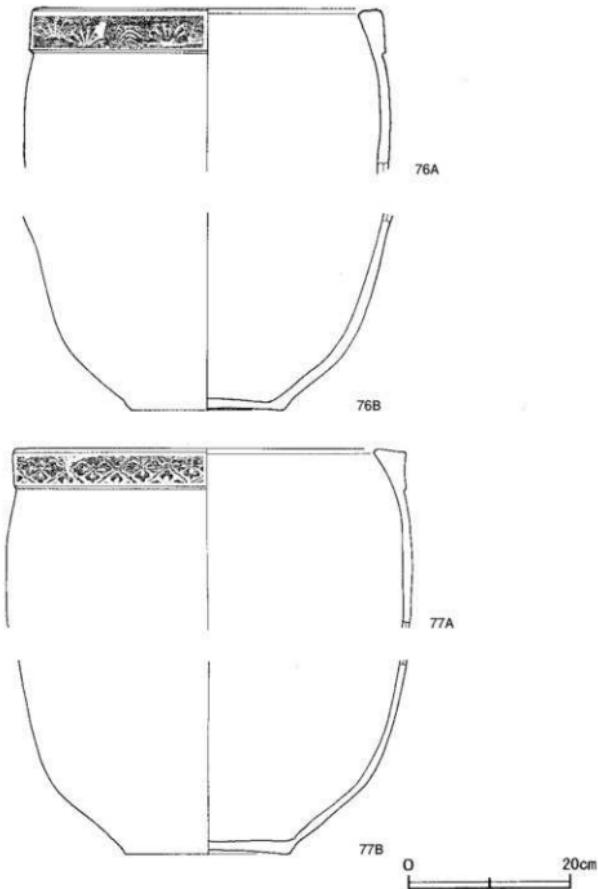
土層解説（各土坑共通）

1 砂 岩 色 ロームブロック多量

所見 1877（明治10）年、妙徳寺を校舎とする島名尋常高等小学校の前身が創立され、1882（明治15）年、校舎が新築されている。76・77は明治期のものであり、校舎基礎跡は妙徳寺から移転した際の校舎と考えられる。また、76・77は便槽と考えられ、第1号建物基礎跡に付属し上屋をもつ便所が、校舎の外に設置されていたことが推測される。主屋に教室があり、第1号建物基礎跡に付属している長方形の基礎跡は宿直室などと推測される。また、2棟の建物基礎跡の東・南側に校庭が想定される。



第26図 第1号建物基礎跡付属施設第5971・5972号土坑実測図



第27図 第1号建物基礎跡付属施設第5971・5972号土坑出土遺物実測図

第1号建物基礎跡付属施設第5971・5972号土坑出土遺物観察表（第27図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
76A	土師質土器	甕	42.1 (20.4)	—	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ	口縁部蓮草文	覆土中	20% 76Bと同一個体
76B	土師質土器	甕	— (21.4)	19.0	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ		覆土中	40% PL11 76Aと同一個体
77A	土師質土器	甕	48.0 (22.2)	—	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ	口縁部花菱文	覆土中	20% 77Bと同一個体
77B	土師質土器	甕	— (23.9)	20.1	長石・石英・黒雲母・赤色粒子	橙	普通	内・外面ナデ		覆土中	40% PL11 77Aと同一個体

5 その他の遺構と遺物

遺物が出土していないことなどから時期を明確にできない竪穴住居跡2軒、井戸跡5基、溝跡10条、土坑64基、ピット25か所が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第3023号住居跡（第28図）

位置 調査区中央部のP 5×4区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第217・218号溝に掘り込まれている。

規模と形状 底面付近まで削平されていることや東側が第217・218号溝に掘り込まれているため、遺存する壁溝から南北軸4.50mで、東西軸は4.30mだけが確認された。主軸方向がN-15°-Wの方形と推測される。壁高は不明である。

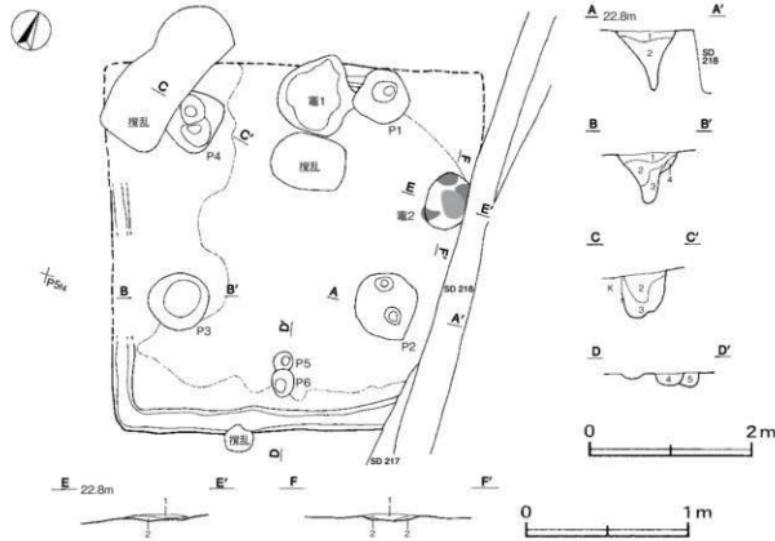
床 ほぼ平坦で、中央部に硬化面が認められる。壁溝が北・南側と西側の一部に確認されている。

竪 北壁中央部に竪1、東壁やや北寄りに竪2が付設されている。北壁部に確認された径1.0mほど、深さ4cmの不整円形の掘り込みは、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子等が含まれている土が埋め戻されており、竪1を構築する際の掘り方と考えられる。竪2は床面に粘土が薄く遺存しているのが確認され、袖部と考えられる。燃焼部幅は34cmである。火床部は床面とほぼ同じ高さであり、火床面は火を受けて赤変硬化している。煙道部は第218号溝に掘り込まれているため不明である。2基の竪は同時に使用されていたのではなく、竪1から竪2への造り替えが推測される。

竪2土層解説

1 に赤褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

2 暗赤褐色 焼土粒子多量、ローム粒子・炭化粒子少量



第28図 第3023号住居跡実測図

ピット 6か所。P 1～P 4は深さ40～76cmで、規模と位置から主柱穴である。P 5・P 6は深さ17cm・14cmで、P 2・P 3のはば中間の南壁寄りに位置していることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 1は竈1を掘り込んでおり、P 2・P 4には深さの違う底面が2か所確認され、また、P 6はP 5を掘り込んでいる。柱穴の掘り直しが推測され、柱の移動が推測される。

ピット土壤解説 (各ピット共通)

1 黒 無 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	4 緑 無 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
2 暗 無 色 ロームブロック少量、焼土粒子微量	5 緑 無 色 ロームブロック中量
3 に深い黄褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量	

遺物出土状況 土師器片110点(坏25、不明85)が出土している。また、混入した磁器片1点も出土している。遺物は各柱穴や煙溝の覆土中から出土している。いずれも細片のため、図示することができない。

所見 時期は、出土土器が細片のため不明である。本跡は、北壁から東壁への竈の造り替えと、柱の移動から上屋の建て替えが推測される。

第3025号住居跡 (第29図)

位置 調査区中央部のP 5e7区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第2号建物基礎、第5990号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.45m、短軸3.00mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は2～4cmで、立ち上がりは不明瞭である。

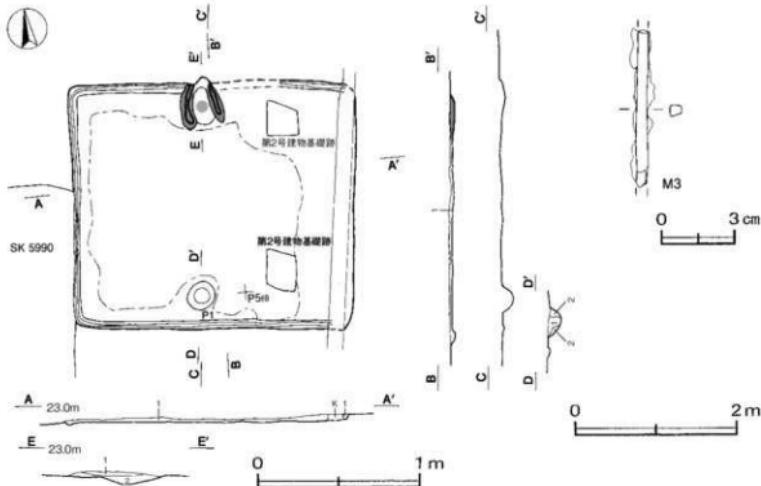
床 ほぼ平坦で、壁際まで硬化面が認められる。煙溝が遺存する壁下に確認されている。

竈 北壁中央部に付設されている。規模は焚口部から煙道部まで58cm、燃焼部幅20cmである。袖部は床面と同じ高さの地山面に粘土で構築されている。火床部は床面より5cmくぼんでおり、火床面は火を受けて赤変色化している。煙道部は壁外へ10cm掘り込み、立ち上がりは不明瞭である。

遺土層解説

1 暗 無 色 ロームブロック・焼土粒子少量

2 赤 無 色 焼土粒子中量、炭化粒子少量



第29図 第3025号住居跡・出土遺物実測図

ビット 深さは18cmで、竈と向かい合う南壁の中央部に位置していることから、出入り口施設に伴うビットと考えられる。

ビット 土層解説

1 細 黄 色 ローム粒子微量

2 黄 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

覆土 単一層である。層厚が薄いため状況は不明である。

土層解説

1 細 黄 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片68点（不明）、鉄製品1点（釘カ）が出土している。また、混入した磁器片1点も出土している。M3は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器が細片のため不明である。

第3025号住居跡出土遺物観察表（第29図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴				出土位置	備考
							埋溝	主柱穴	出入り口	ビット		
M3	釘カ	(6.5)	0.5	0.4	(6.0)	鉄	両端欠損 断面方形	—	—	—	覆土中	—

表6 壁穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長(東西)軸 × 幅(南北)軸	壁高 (cm)	床面	埋溝	内部施設			覆土	主な出土遺物	時期
								主柱穴	出入り口	ビット			
3023	P 5 e1	N -15° -W	方盤	4.50×(4.30)	—	平頭	部分	4	2	—	—	北・東	—
3025	P 5 e7	N -6° -E	方盤	3.45×3.00	2~4	平頭	全周	—	1	—	—	北	不明

(2) 井戸跡

第109号井戸跡（第30図）

位置 調査区南西部Q 4 b2区、標高21mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第98号堀跡を掘り込んでいる。

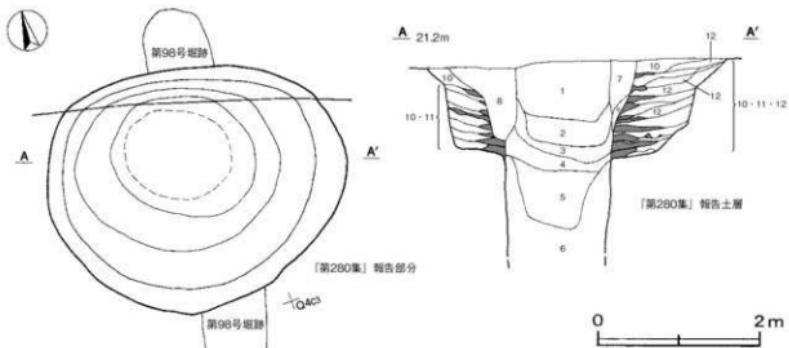
規模と形状 『茨城県教育財團文化財調査報告第280集』で「二段掘りの井戸跡」と報告されている。今回の調査で、長径3.68m、短径3.02mの楕円形で、長径方向はN-71°-Wであることが確認された。深さは前回の調査で、230cmほど確認されている。

覆土 12層に分層できる。第1~9層は人為堆積、第10~12層は黒色土とローム土が版築状に埋土された土層である。なお、土層解説については、『第280集』で掲載されているものを抜粋した。

土層解説

1	暗	黄	色	ロームブロック少量、粘土ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	7	灰	黄	褐	色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
2	暗	褐	色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	8	暗	褐	色	ロームブロック少量、粘土粒子微量	
3	暗	褐	色	ロームブロック中量、焼土粒子微量	9	にい	青褐色	ロームブロック・粘土粒子中量		
4	黒	褐	色	ロームブロック少量、粘土ブロック微量	10	にい	青褐色	ロームブロック多量		
5	暗	褐	色	ロームブロック多量、粘土ブロック少量	11	黒	—	—	ローム粒子微量	
6	灰	褐	色	ロームブロック中量、粘土粒子少量	12	にい	青褐色	ロームブロック・粘土ブロック中量		

所見 時期は、16世紀後半の第98号堀跡より新しいが、出土土器がないため不明である。



第30図 第109号井戸跡実測図

第133号井戸跡（第31図）

位置 調査区東部のP 6 j3区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第96号掘跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 東側が第96号掘跡と重複しているため、南北径2.52mで、東西径は1.06mだけが確認された。南北径方向がN - 3° - Wの楕円形と推測される。深さ200cmほど掘り下げた時点では、湧水のため下部の調査を断念した。形状は、壁が一部外に膨らむ漏斗状と考えられる。

覆土 5層に分層できる。第3・5層はロームブロックを多く含んでいる人為堆積、第1・2・4層は周囲から土砂が流入した堆積状況から自然堆積である。

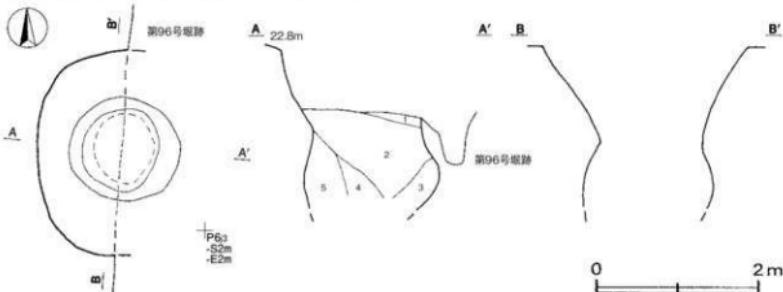
土層解説

- | | |
|-------|--------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 暗褐色 | ロームブロック多量 |

- | | |
|-------|------------------|
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 |
| 5 黒褐色 | ロームブロック多量、炭化粒子少量 |

遺物出土状況 土師質土器片14点（内耳鍋）、陶器片1点（不明）が出土している。いずれも細片で、図示することができない。

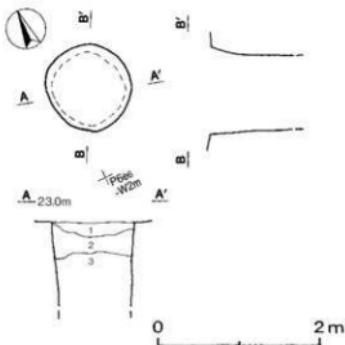
所見 時期は、出土土器が細片のため不明である。



第31図 第133号井戸跡実測図

第138号井戸跡（第32図）

位置 調査区東部のP 6 d6区、標高23mの台地平坦部に位置している。



規模と形状 径1.05mの円形である。深さ100cmほど掘り下げた時点で、湧水のため下部の調査を断念した。形状は壁の立ち上がりから、円筒状と考えられる。

覆土 3層に分層できる。第2・3層はロームブロックを含んでいる人為堆積、第1層は周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

1	暗	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量
2	暗	褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量
3	暗	褐色	ロームブロック多量

所見 時期は、出土土器がないため不明である。

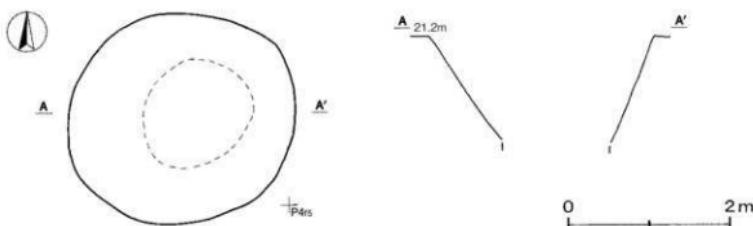
第32図 第138号井戸跡実測図

第139号井戸跡（第33図）

位置 調査区西部のP 4 e4区、標高21mの台地平坦部に位置している。

規模と形状 径2.87mの円形である。深さ130cmほど掘り下げた時点で、湧水のため下部の調査を断念した。形状は壁の立ち上がりから、漏斗状と考えられる。

所見 時期は、出土土器がないため不明である。



第33図 第139号井戸跡実測図

第140号井戸跡（第34図）

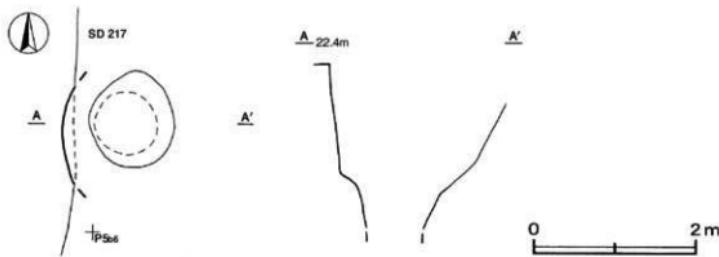
位置 調査区北部のP 5 a6区、標高22mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第217号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 第217号溝跡と144cmの深さまで重複しているため、溝跡の底面で径1.10mの円形の掘り込みが確認されただけである。溝跡の底面から深さ70cmほど掘り下げた時点で、湧水のため下部の調査を断念した。形状は不明である。

遺物出土状況 土師質土器片8点（小皿1、内耳鍋7）が出土している。また、流れ込んだ土師器片14点も出土している。いずれも細片で、図示することができない。

所見 時期は、出土土器が細片のため不明である。



第34図 第140号井戸跡実測図

表7 井戸跡一覧表

番号	位置	長(南北)×幅(東西)	平面形	規模(m)		深さ(cm)	形状	底面	覆土	主な出土遺物	時期
				長(東西)	幅(南北)						
109	Q 4 b2	N - 7° - W	椭円形	3.68	3.02	(230)	二段掘り	-	人	-	不明
133	P 6 j3	N - 3° - W	〔椭円形〕	(1.06)	(2.52)	(200)	漏斗状	-	自・人	土師質土器 陶器	不明
138	P 6 d6	-	円形	1.05	1.05	(100)	円筒状	-	自・人	-	不明
139	P 4 e4	-	円形	2.87	2.87	(130)	漏斗状	-	-	-	不明
140	P 5 a6	-	-	(1.10)	(1.10)	(70)	-	-	-	土師質土器	不明

(3) 溝跡

第211号溝跡（第3・35図）

位置 調査区北部のP 6 a4区、標高23mの台地平坦部に位置している。

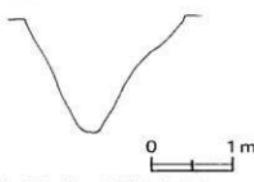
A 22.6m

重複関係 第96号堀跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 確認された長さは3.64mで、北方向（N - 5° - E）へ直線的に延び、北側は調査区域外に至っており、南端は第96号堀跡と重複している。上幅1.96～2.28m、下幅0.20m、深さ141cmである。断面形は薬研状である。底面に高差はない。

遺物出土状況 土師器片16点（不明）が出土している。いずれも細片で摩滅しており、図示することができない。

A'



第35図 第211号溝跡実測図

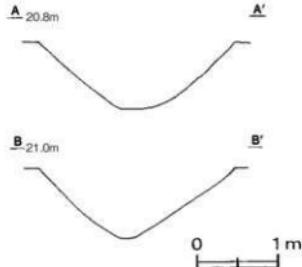
所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。規模や断面形から堀と考えられるが、詳細は不明である。

第212号溝跡（第3・36図）

位置 調査区西北部のP 4 a2区～P 4 g1区、標高21mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5951・5952・5977号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 確認された長さは21.8mで、北方向（N - 13° - E）へ直線的に延び、北端は第5977号土坑と重複している。上幅2.00～2.40m、下幅0.10～0.41m、深さ72～84cmである。断面形は薬研状及びU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面に高差はない。



第36図 第212号溝跡実測図

遺物出土状況 土師器片1428点（壺29、甕・椀類430、高台付皿6、甕16、瓶5、不明942）、土師質土器片168点（不明）、陶器片4点（不明）、鉄鋌2点が出土している。また、花崗岩片も出土している。土器片や陶器片はいずれも細片で摩滅しており、図示することができない。

所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。北側にさらに延びている可能性も考えられる。規模や断面形から堀と考えられるが、詳細は不明である。

第213号溝跡（第3・37図）

A 21.4m A' 位置 調査区中央部のP 4 e7区、標高21mの台地平坦部に位置している。
重複関係 第5937号土坑に掘り込まれている。
規模と形状 確認された長さは1.90mで、北方向（N - 3° - E）へ直線的に延び、北端は第5937号土坑に掘り込まれ、南側は削平のため不明瞭である。上幅0.55～0.80m、下幅0.33～0.50m、深さ10cmである。断面形は逆台形状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面に高低差はみられない。

所見 時期は、出土遺物がないため不明である。また、性格も不明である。

第214号溝跡（第3・38図）

A 22.0m A' 位置 調査区南部のQ 4 b7区、標高22mの台地平坦部に位置している。
重複関係 第5934号土坑に掘り込まれている。
規模と形状 確認された長さは4.10mで、北方向（N - 19° - E）へ直線的に延び、北端は第5934号土坑に掘り込まれている。上幅0.10～0.44m、下幅0.04～0.33m、深さ3～7cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面に高低差はみられない。

覆土 単一層である。層厚が薄いため堆積状況は不明である。

土層解説
1 塗 馬 色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

所見 時期は、出土遺物がないため不明である。また、性格も不明である。

第215号溝跡（第3・39図）

A 22.0m A' 位置 調査区北部のP 5 a2区、標高22mの台地平坦部に位置している。
規模と形状 確認された長さは1.05mで、北方向（N - 3° - E）へ直線的に延び、南北両側とともに削平のため不明瞭である。上幅0.33～0.39m、下幅0.19～0.22m、深さ66cmである。断面形は逆台形状で、壁は外傾して立ち上がっている。底面に高低差はみられない。

第39図 第215号溝跡実測図

覆土 4層に分層できる。周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	炭化粒子微量	3 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量
2 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子中量

所見 時期は、出土遺物がないため不明である。また、性格も不明である。

第216号溝跡（第3・40図）

位置 調査区中央部のO 5 j0区～P 5 i9区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第96号堀跡、第219号溝跡を掘り込み、第2号建物基礎に掘り込まれている。第5985号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 長さは365mで、北方向（N - 8° - E）へ直線的に延びている。上幅1.16～1.70m、下幅0.42～1.00m、深さ20～55cmである。断面形は逆台形状及びU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は中央部に向かって深くなっている、高低差は35cmである。

覆土 5層に分層できる。第3・5層はロームブロックを多く含んでいることから人為堆積、第1・2・4層は周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色	ロームブロック微量	4 暗褐色	ローム粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ロームブロック多量
3 黒褐色	ロームブロック中量		

所見 時期は、出土遺物がないため不明である。規模や断面形から堀と考えられるが、詳細は不明である。

第217号溝跡（第3・41図）

位置 調査区中央部のO 5 j6区～P 5 i4区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3022～3024住居跡、第96号堀跡、第219号溝跡を掘り込み、第218号溝に掘り込まれている。第140号井戸跡、第5984号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

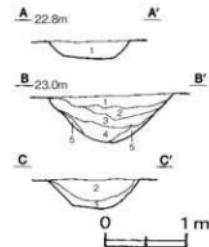
規模と形状 確認された長さは35.8mで、北方向（N - 10° - E）へ直線的に延び、北側は調査区域外に至っている。上幅2.00～2.50m、下幅0.30～0.50m、深さ125～130cmである。断面形は薬研状である。底面は南から北に向かって低くなっている、高低差は63cmである。

覆土 7層に分層できる。第1・2層はロームブロックを多く含んでいることから人為堆積、第3～7層は周囲から土砂が流入した状況から自然堆積である。

土層解説

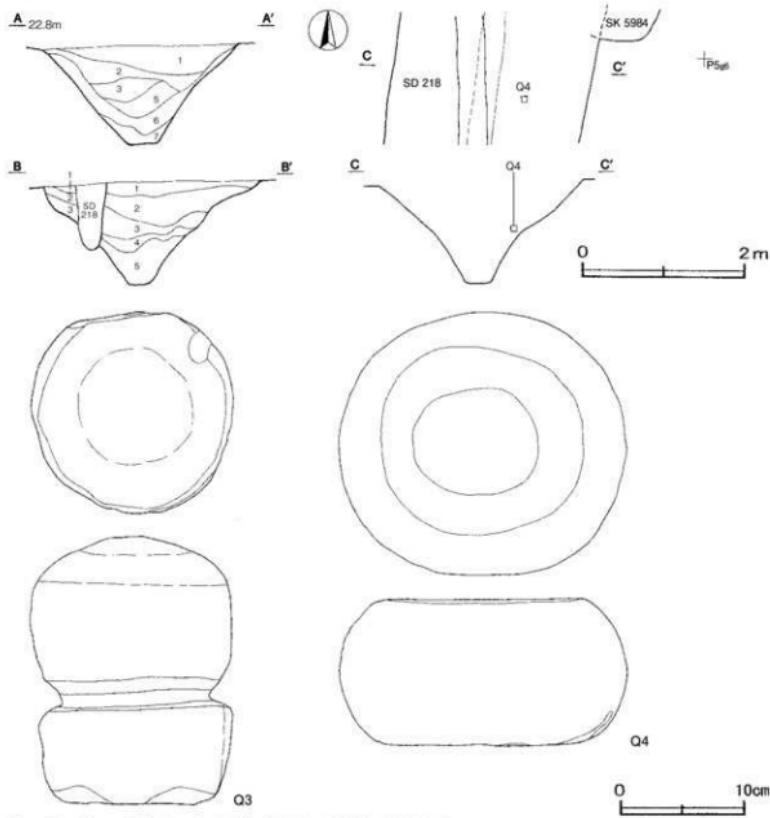
1 暗褐色	ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量	5 黒褐色	ローム粒子少量、粘土粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子多量、炭化粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子多量	7 暗褐色	ローム粒子少量
4 暗褐色	ロームブロック少量		

遺物出土状況 土師器片225点（壺・椀類31、甌4、不明190）、土師質土器片92点（小皿25、内耳鉢64、鉢鉢3）、陶器片16点（不明）、石製品2点（五輪塔）、古銭1点、鐵滓1点が出土している。また、花崗岩片も出土している。Q 4は壁際の覆土中層から出土している。Q 3は覆土中層から出土している。土器片や陶器片はいずれも細部で摩滅しており、図示することができない。



第40図
第216号溝跡実測図

所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。規模や断面形から堀と考えられるが、詳細は不明である。



第41図 第217号溝跡・出土遺物実測図、遺物出土状況図

第217号溝跡出土遺物観察表（第41図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (kg)	石質	特徴	出土位置	備考
Q 3	五輪塔	220	166	166	(9.0)	花崗岩	空・風輪	覆土中	
Q 4	五輪塔	120	237	215	(8.2)	花崗岩	水輪	中層	

第218号溝跡（第3・42図）

位置 調査区中央部のP 5a5区～P 5i5区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3022・3023号住居跡、第96号溝跡、第217・219号溝跡を掘り込んでいる。

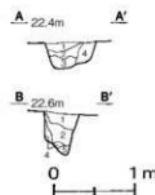
規模と形状 長さは31.5mで、北方向(N - 2° E)へ直線的に延びている。上幅0.29～0.68m、下幅0.12～0.21m。

深さ32~59cmである。断面形はU字状で、壁は直立または外傾して立ち上がっている。底面に高低差はみられない。

覆土 5層に分層できる。第2~5層は、ロームブロックを多く含んでいることから人為堆積、第1層は周囲から土砂が堆積した状況から自然堆積である。

土層解説（各土層共通）

- 1 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ロームブロック多量
- 4 暗褐色 ロームブロック多量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量



第42図
第218号溝跡実測図

遺物出土状況 土師器片17点（不明）、須恵器片1点（甕）、陶器片1点（不明）、鐵滓1点が出土している。土器片や陶器片はいずれも細片で摩滅しており、図示することができない。

所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

第219号溝跡（第3・43図）

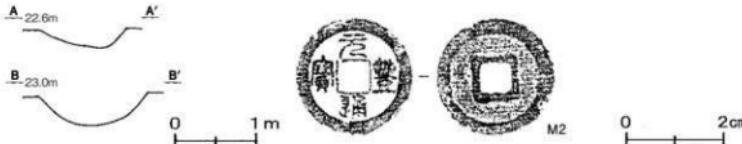
位置 調査区中央部のP 515区～P 611区、標高23mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第3022号住居跡を掘り込み、第2号建物基礎跡、第216~218号溝に掘り込まれている。第5980号土坑とも重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と形状 確認された長さは25.0mで、北方向（N-80°W）へ直線的に延び、西側が第217号溝に掘り込まれ、中央部及び東側は不明瞭である。上幅0.86~1.54m、下幅0.20~0.60m、深さ22~33cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面に高低差はみられない。

遺物出土状況 土師器片41点（坏2、不明39）、須恵器片15点（不明）、土師質土器片105点（小皿9、内耳鉗18、捕鉢5、不明73）、土製品1点（羽口）、石製品1点（石臼カ）、古錢1点（元豐通寶）が出土している。また、花崗岩片が出土している。M2は覆土中から出土しており、流れ込んだものである。また土器片はいずれも細片で摩滅しており、図示することができない。

所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

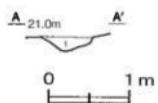


第43図 第219号溝跡・出土遺物実測図

第219号溝跡出土遺物観察表（第43図）

番号	銭名	径	孔径	厚さ	重量	初銭年	特徴	出土位置	備考
M2	元豐通寶	23	0.7	0.1	32	1078	葉書	覆土中	

第220号溝跡 (第3・44図)

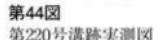


位置 調査区西部のP 4 h2区、標高21mの台地平坦部に位置している。

重複関係 第5955号土坑を掘り込んでいる。



規模と形状 長さは5.42mで、北方向(N-15°-E)へ直線的に延びている。上幅0.54~0.65m、下幅0.22~0.37m、深さ20cmである。断面形はU字状で、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。底面に高低差はみられない。



第220号溝跡実測図 覆土 単一層である。周囲から土砂が堆積した状況から自然堆積である。

土層解説

1 塗 土色 ロームブロック・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片1点(不明)、土師質土器片2点(小皿、不明)、陶器片1点(不明)が出土している。いずれも細片で摩滅しており、図示することができない。

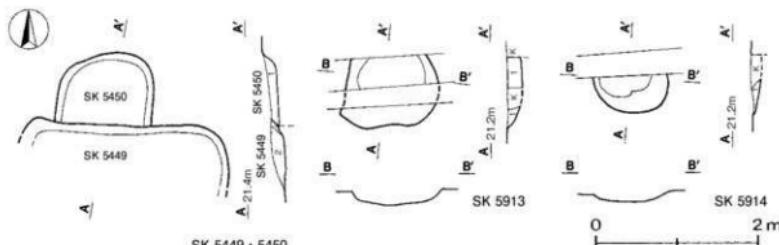
所見 時期は、本跡に伴う遺物が出土していないため不明である。また、性格も不明である。

表8 溝跡一覧表

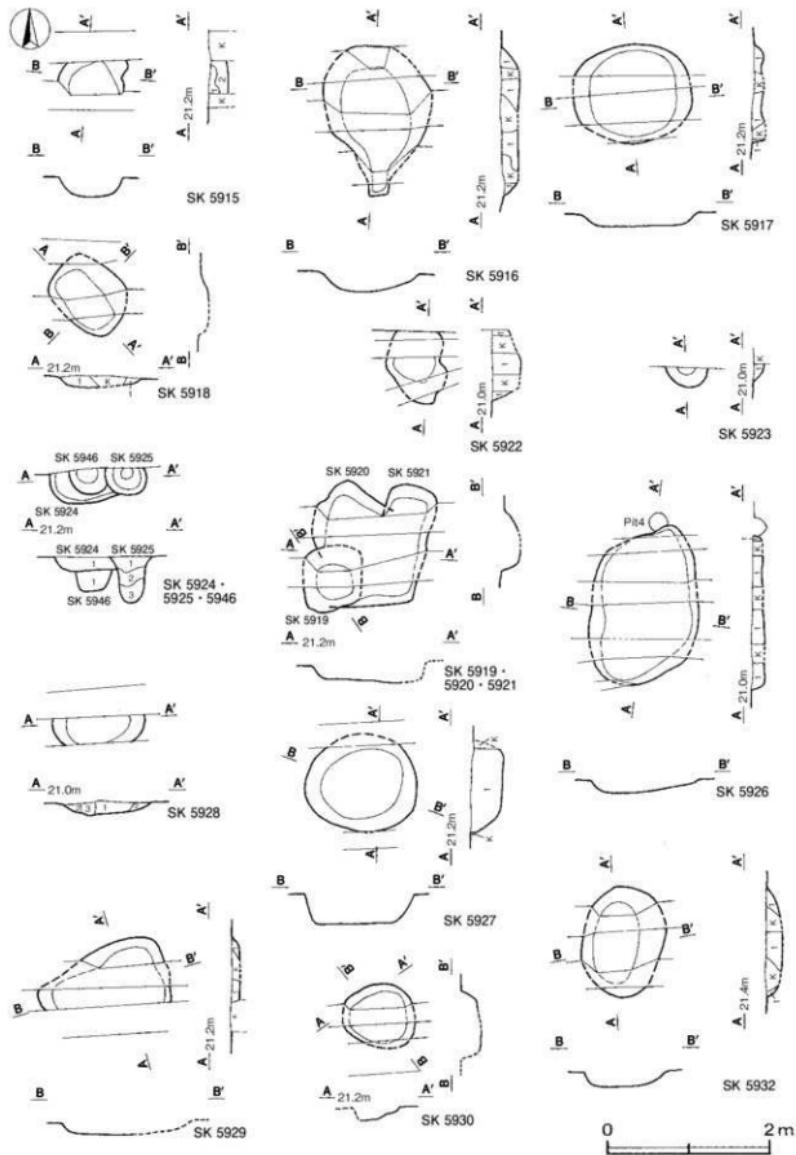
番号	位置	走行方向	形狀	規 模			覆土	断面形	主な出土遺物	時期	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)					
211	P 6 a4	N-5°-E	直線状	(3.64)	1.96~2.28	0.20	111	-	漆器片	不明	
212	P 4 e2~P 4 g1	N-13°-E	直線状	(21.8)	2.00~2.40	0.10~0.41	72~84	-	漆研状 U字状 鐵鋌	不明	
213	P 4 e7	N-3°-E	直線状	(1.90)	0.55~0.80	0.33~0.50	10	-	逆台形状	不明	
214	Q 4 b7	N-19°-E	直線状	(4.10)	0.10~0.44	0.04~0.33	3~7	-	U字状	不明	
215	P 5 a2	N-3°-E	直線状	(1.05)	0.33~0.39	0.19~0.22	66	自然	逆台形状	不明	
216	O 5 a0~P 5 a9	N-8°-E	直線状	36.5	1.16~1.70	0.42~1.00	20~55	自・人	U字状	不明	
217	O 5 a6~P 5 a4	N-10°-E	直線状	(35.8)	2.00~2.50	0.30~0.50	125~130	自・人 石製品	漆器 鐵鋌	不明	
218	P 5 a5~P 5 a5	N-2°-E	直線状	31.5	0.29~0.68	0.12~0.21	32~59	自・人	U字状	漆器 鐵鋌	不明
219	P 5 a5~P 6 j1	N-80°-W	直線状	(25.0)	0.86~1.54	0.20~0.60	22~33	-	U字状	土師器 漆器 鐵鋌 土師質土器 羽口 右口 古鏡	不明
220	P 4 h2	N-15°-E	直線状	5.42	0.54~0.65	0.22~0.37	20	自然	U字状	土師器 土師質土器 陶器	不明

(4) 土坑 (第45~49図)

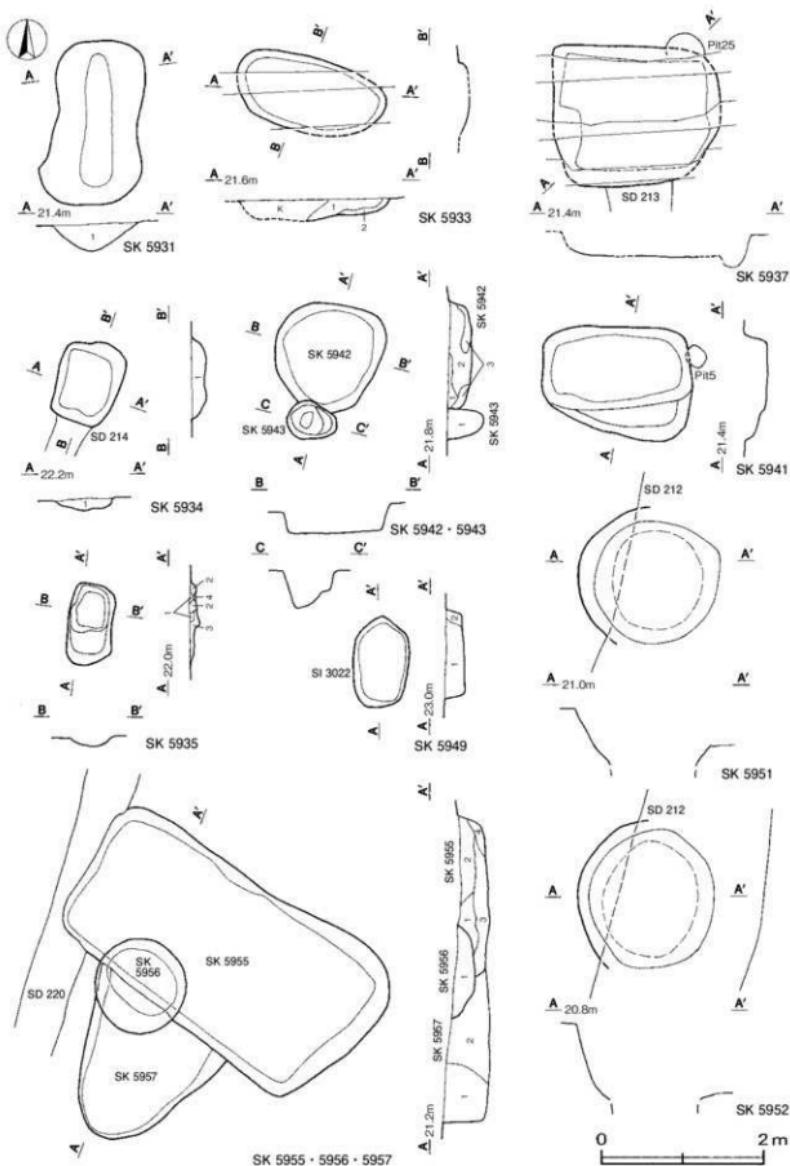
時期が不明な土坑について、実測図と土層解説を遺構順、規模等を一覧表で掲載する。



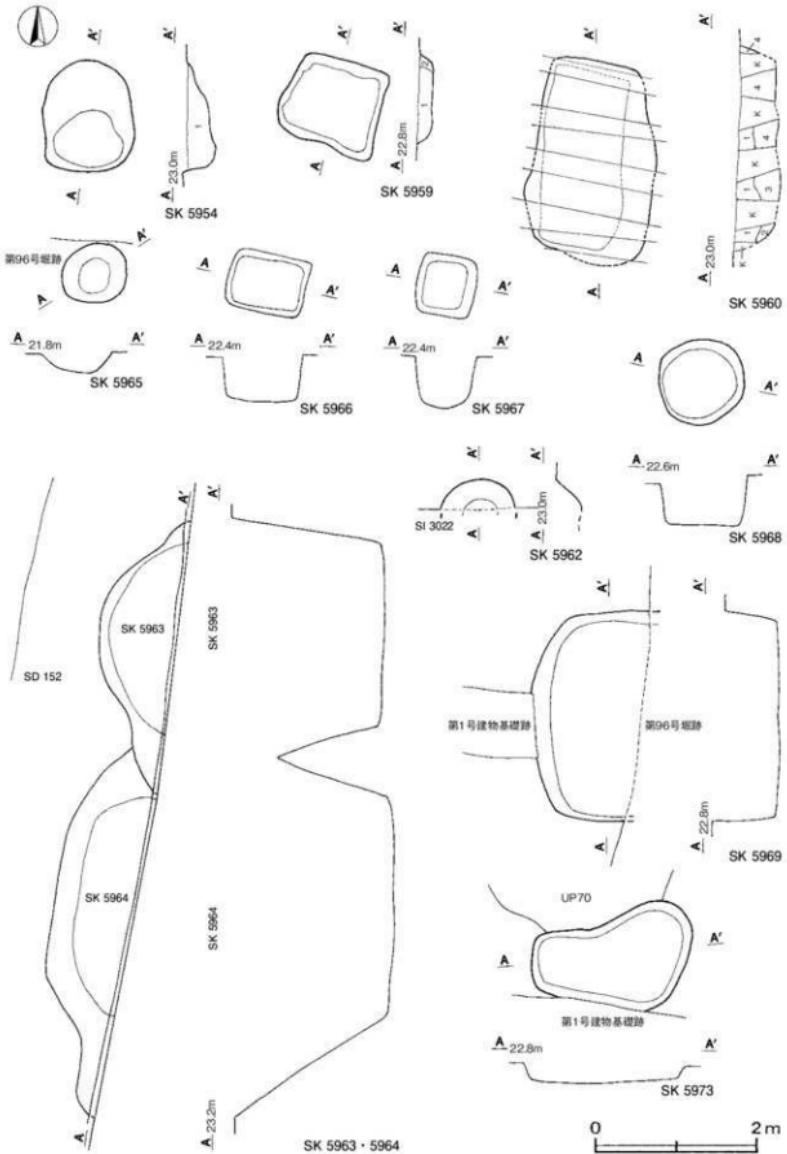
第45図 その他の土坑実測図(1)



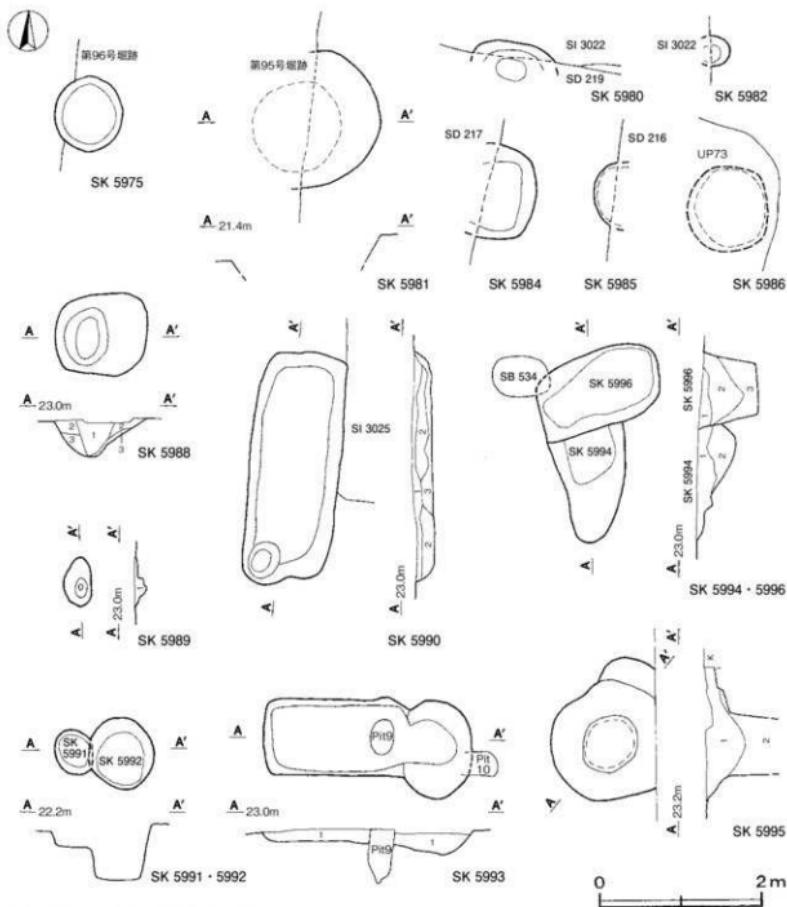
第46図 その他の土坑実測図(2)



第47図 その他の土坑実測図(3)



第48図 その他の土坑実測図(4)



第49図 その他の土坑実測図(5)

第5449号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第5450号土坑土層解説

- 1 茶色 ロームブロック多量

第5913号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量

第5914号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第5915号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

2 黒褐色 ローム粒子微量

第5916号土坑土層解説

- 1 楊褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子微量

第5917号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・粘土ブロック少量

第5918号土坑土層解説

- 1 黑色 ロームブロック少量

第5922号土坑土層解説

- 1 黑褐色 粘土ブロック・炭化粒子微量

第5923号土坑土層解説

- 1 黑色 ローム粒子微量

第5924号土坑土層解説

- 1 黑褐色 炭化物中量、粘土粒子少量

第5925号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

2 黑褐色 ローム粒子微量

3 黑褐色 ローム粒子中量

第5926号土坑土層解説
1 黒褐色 ロームブロック微量
第5927号土坑土層解説
1 暗褐色 ロームブロック少量
第5928号土坑土層解説
1 黒褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ロームブロック少量
3 褐色 ロームブロック中量
第5929号土坑土層解説
1 暗褐色 ロームブロック少量
第5931号土坑土層解説
1 楊褐色 ローム粒子微量
第5932号土坑土層解説
1 暗褐色 ロームブロック中量、燒土ブロック微量
第5933号土坑土層解説
1 暗褐色 粘土粒子中量、ロームブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
第5934号土坑土層解説
1 楊褐色 ロームブロック微量
第5935号土坑土層解説
1 暗褐色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ロームブロック微量
3 暗褐色 ローム粒子中量
4 黑褐色 ロームブロック少量
第5942号土坑土層解説
1 黑褐色 ロームブロック少量
2 黑褐色 ローム粒子少量
3 暗褐色 ローム粒子微量
第5943号土坑土層解説
1 暗褐色 ロームブロック微量
第5946号土坑土層解説
1 黑褐色 ローム粒子少量、燒土粒子微量
第5949号土坑土層解説
1 黑褐色 ロームブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量
第5954号土坑土層解説
1 褐色 ロームブロック・黒色土ブロック少量
第5955号土坑土層解説
1 楊褐色 ロームブロック、炭化粒子微量
2 黑褐色 ロームブロック少量
3 暗褐色 ロームブロック少量
4 暗褐色 ロームブロック微量

表9 土坑一覧表

番号	位置	長軸(±)方向 南北軸(±)方向	平面形	規模(m)		深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考	
				長軸(±)×短軸(±) 東西軸(±)×南北軸(±)	面積(m ²)						重複関係(古→新)	
5449	Q 4 b3	N - 85° - W	〔方形・長方形〕	(2.50) × (0.75)	20	板鈎	平坦	自然			S K5450 → 本跡	
5450	Q 4 b3	N - 78° - E	〔椭円形〕	(1.15) × 0.90	17	板鈎	平坦	自然	土師器	土師質土器	本跡 → S K5449	
5913	P 4 c6	N - 3° - W	〔円形・椭円形〕	1.10 × (0.82)	17	板鈎	平坦	自然	土師器	土師質土器	-	
5914	P 4 d7	N - 85° - W	〔椭円形〕	0.91 × (0.72)	12	板鈎	平坦	自然			-	
5915	P 4 e7	-	〔円形・椭円形〕	0.80 × (0.41)	24	板鈎	平坦	自然			-	
5916	P 4 d4	N - 4° - E	〔不整椭円形〕	1.85 × 1.30	24	板鈎	風状	自然			-	
5917	P 4 d8	N - 85° - E	椭円形	1.47 × 1.23	18	板鈎	平坦	自然	土師質土器		-	
5918	P 4 d7	N - 43° - W	椭円形	1.00 × 0.78	13	板鈎	平坦	自然	磁器		-	
5919	P 4 d5	-	方形	0.76 × (0.72)	23	板鈎	風状	-			S K5920 - 5921と新旧不明	
5920	P 4 d5	N - 13° - E	〔方形・長方形〕	(0.98) × (0.78)	22	板鈎	平坦	-			S K5919 - 5921と新旧不明	
5921	P 4 d5	N - 15° - E	〔長方形〕	(0.64) × 1.45	27	外傾	平坦	-			S K5919 - 5920と新旧不明	
5922	P 4 a7	N - 15° - W	〔不整椭円形〕	0.65 × (0.92)	35	外傾	平坦	自然			-	
5923	P 4 a7	N - 85° - W	〔円形・椭円形〕	0.53 × (0.24)	13	板鈎	風状	自然			-	
5924	P 4 e3	N - 85° - E	〔椭円形〕	(0.67) × (0.42)	16	板鈎	平坦	自然	土師器	不明鉄製品	S K5946 → 本跡 → S K5925	
5925	P 4 e3	N - 59° - W	〔円形・椭円形〕	0.51 × (0.34)	37	外傾	平坦	自然			S K5924 - 5946 → 本跡	
5926	P 4 a7	N - 15° - E	椭円形	2.04 × 1.31	16	板鈎	平坦	自然			PA4 → 本跡	
5927	P 4 e8	N - 80° - E	〔椭円形〕	1.29 × [1.20]	36	板鈎	平坦	自然	土師器	不明鉄製品	-	

番号	位置	長軸(洋)方向 南北軸(横)方向	平面形	規模(m)		深さ(cm)	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	
				長軸(洋)×短軸(横) 東西(横)(洋)×南北(横)(洋)	幅(横)					重複関係(古→新)	
5928	P 4 b6	N - 85° - E	[椭円形]	1.13	× 0.32	14	壁斜	圓状	自然		-
5929	P 4 b7	N - 75° - E	[椭円形]	1.60	× 0.80	18	壁斜	平坦	自然	土師質土器	-
5930	P 4 e6	N - 61° - W	[円形]	0.82	× 0.82	24	壁斜	平坦	-	陶器 瓶器	-
5931	P 4 b6	N° - 0°	[椭円形]	2.00	× 1.10	33	壁斜	平坦	自然	土師質土器	-
5932	P 4 e7	N - 7° - E	[椭円形]	1.37	× 0.99	19	壁斜	平坦	人為		-
5933	P 4 g9	N - 72° - W	[椭円形]	1.87	× 0.90	25	壁斜	平坦	自然	土師器 瓶器	-
5934	Q 4 b7	N - 15° - E	長方形	1.04	× 0.80	15	壁斜	圓状	自然	土師器	S D214→本跡
5935	Q 4 b6	N - 3° - E	長方形	1.00	× 0.55	12	壁斜	平坦	人為		-
5937	P 4 e7	N - 88° - W	不整長方形	2.05	× 1.72	29	壁斜	平坦	-	土師質土器	S D213→本跡 P 125と新Ⅲ-4-8
5941	Q 4 a3	N - 79° - W	[椭円形]	1.86	× 1.31	31	壁斜	平坦	-	土師質土器	P 15と新旧不明
5942	P 4 j6	N - 62° - E	方形	1.43	× 1.35	31	外傾	平坦	人為		本跡→S K 5943
5943	Q 4 j6	N - 74° - W	[椭円形]	0.62	× 0.47	48	外傾	圓狀	自然		S K5942→本跡
5946	P 4 e3	-	[円形]	(0.46)	× (0.32)	41	壁斜	平坦	自然		本跡→S K 5924-5925
5949	P 5 b6	N - 2° - E	不整橢丸長方形	1.12	× 0.70	24	直立	平坦	自然	土師器	S I 3022→本跡
5951	P 4 e2	-	[円形]	(1.7)	× (1.7)	(68)	外傾	-	-		S D212と新旧不明
5952	P 4 e2	-	[円形]	(1.7)	× (1.7)	(90)	外傾	-	-		S D212と新旧不明
5954	P 5 f7	N - 2° - W	[椭円形]	1.37	× 1.10	39	外傾	平坦	自然	土師器 須恵器	-
5955	P 4 i2	N - 55° - W	長方形	4.08	× 2.17	46	壁斜	平坦	人為	土師質土器	S K5957→本跡→S D 220, S K5956
5966	P 4 i2	-	[円形]	1.14	× 1.13	30	壁斜	平坦	自然		S K5957→S K 3965→本跡
5967	P 4 i2	N - 32° - E	[椭円形]	(1.69)	× 1.64	53	直立	平坦	人為		本跡→S K 5955-S K 5956
5959	P 6 h5	N - 73° - W	橢丸長方形	1.21	× 1.05	19	壁斜	平坦	人為	土師器 瓶器	-
5960	P 6 g6	N - 10° - E	長方形	(2.50)	× 1.50	52	壁斜	平坦	人為	須恵器 土師質土器	-
5962	P 5 g6	N - 88° - E	[円形]-[椭円形]	0.90	× (0.60)	23	壁斜	平坦	-		S I 3022と新旧不明
5963	P 6 f7	N - 8° - E	[円形]-[椭円形]	(0.90)	× 0.40	196	直立	-	-		S K5964→本跡→S D 152
5964	P 6 f7	N - 12° - E	[円形]-[椭円形]	(0.90)	× (0.60)	198	外傾	平坦	-	土師器 土師質土器	本跡→S K 5963-S D 152
5965	P 5 a7	N - 56° - E	[円形]	0.80	× 0.73	25	壁斜	平坦	-		第96号車跡と新旧不明
5966	O 5 j8	N - 78° - W	長方形	0.98	× 0.74	57	直立	平坦	-		-
5967	O 5 j9	-	方形	0.74	× 0.74	64	外傾	圓狀	-		-
5968	P 5 a9	-	[円形]	1.07	× 1.07	60	外傾	平坦	-		-
5969	P 6 c3	N - 2° - W	[方形]-[長方形]	(1.36)	× 2.39	77	外傾	平坦	-	土師器 陶器	本跡→第1号建物基礎跡 第96号車跡と新旧不明
5973	P 6 c5	N - 84° - E	不整捨円形	1.97	× (1.28)	24	外傾	平坦	-		第70号車下式坑→木跡→第1号建物基礎跡
5975	P 4 b6	-	[円形]	0.90	× 0.88	-	-	-	-	土師質土器 鉄滓	第96号車跡→本跡
5980	P 5 b6	N - 80° - W	[円形]-[椭円形]	(1.00)	× (0.20)	-	-	-	-	土師質土器 陶器	S I 3022→本跡 S D 219
5981	P 5 c3	-	[円形]-[椭円形]	(1.84)	× 1.70	(34)	壁斜	-	-		第95号車跡と新旧不明
5982	P 5 b7	N - 15° - E	[円形]-[椭円形]	(0.21)	× 0.10	-	-	-	-	土師器 須恵器	S I 3022と新旧不明
5984	P 5 k5	N - 3° - E	[円形]-[椭円形]	(0.30)	× 0.60	24	直立	-	-		S D 217と新旧不明
5985	P 5 e9	-	[円形]-[椭円形]	(0.53)	× 0.55	-	-	-	-	土師器 陶器	S D 216と新旧不明
5986	P 6 d2	-	[円形]	(0.55)	× (0.53)	-	-	-	-	土師器 須恵器	UP T 3と新旧不明
5988	P 5 b6	N - 86° - W	[椭円形]	1.15	× 1.03	45	壁斜	圓狀	人為	土師器 陶器	-
5989	P 5 b6	N - 0°	[椭円形]	0.61	× 0.37	14	壁斜	門凸	自然		-
5990	P 4 e7	N - 7° - E	長方形	2.78	× 1.15	20	壁斜	平坦	人為	土師器 土師質土器	S I 3025→本跡
5991	P 5 a4	N - 25° - W	[椭円形]	0.56	× (0.45)	29	外傾	平坦	-	土師器 須恵器	S K5992と新旧不明
5992	P 5 a4	N - 12° - W	[椭円形]	0.92	× 0.80	65	外傾	平坦	-	土師器 須恵器	S K5993と新旧不明
5993	P 5 b6	N - 89° - W	不整長方形	2.60	× 0.95	30	壁斜	平坦	-	土師器	本跡→P 17 P 110と新旧不明
5994	P 5 e7	N - 7° - W	[椭円形]	0.79	× (1.37)	45	壁斜	圓狀	自然	土師質土器	本跡→S K 5996
5995	P 5 a6	N - 38° - E	[椭円形]	(1.29)	× 1.79	(84)	壁斜	-	自然		本跡→第2号建物基礎跡
5996	P 5 d7	N - 71° - W	長方形	1.53	× 0.83	73	外傾	平坦	自然		S K5994-S 本跡 S B 534と新旧不明

(5) ピット (第3図)

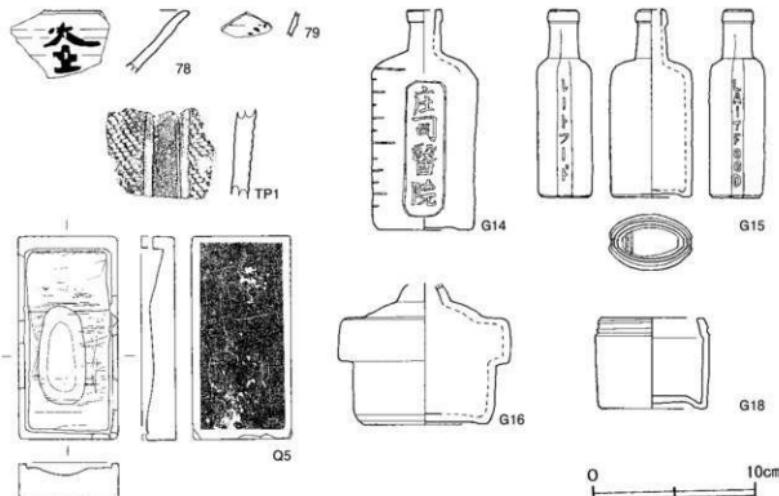
形状が円形または楕円形のピットが25か所確認されている。これらは一部に集中して分布しておらず、調査区域内に散在しており、性格は不明である。実測図は全体図で示し、規模を計測表で記載する。

表10 ピット計測表

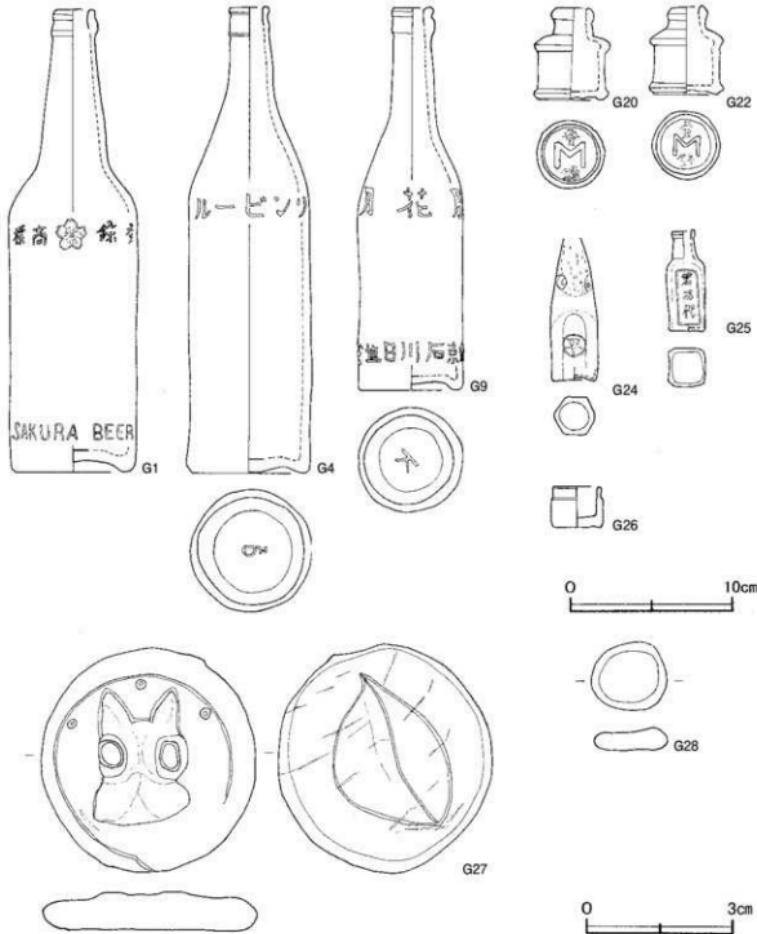
番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	P 5 b6	47	32	(36)	6	P 5 b6	18	13	15	11	Q 4 b1	63	39	38
2	P 5 b6	39	30	(41)	7	P 5 b6	28	23	50	12	Q 4 b1	55	(35)	66
3	P 5 f7	68	56	41	8	P 5 b6	34	30	47	13	Q 4 b5	(55)	42	60
4	P 4 a7	23	23	24	9	P 5 b6	44	30	(57)	14	Q 4 a4	65	38	40
5	Q 4 a3	26	22	48	10	P 5 b6	(33)	30	11	15	Q 4 b5	72	(64)	61
番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
16	Q 4 b5	107	(75)	75	21	P 6 g5	63	44	10					
17	Q 4 b5	43	42	42	22	P 6 g5	89	77	24					
18	Q 4 b5	103	75	48	23	Q 4 a6	49	(34)	50					
19	Q 4 b6	79	40	32	24	Q 4 a5	40	(26)	39					
20	Q 4 b5	55	45	15	25	P 4 e8	48	37	41					

(6) 遺構外出土遺物 (第50・51図)

遺構に伴わない遺物のうち、特徴的なものを実測図と遺物観察表で記述する。



第50図 遺構外出土遺物実測図(1)



第51図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表（第50・51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
78	土師器	环・楕形	-	-	-	長石・石英・白雲母	褐	普通	外面ロクロナデ 内面ヘウ磨き	S.D217 P.L12 「大土」 壁土中	墨書
79	埴器	环形	-	-	-	長石・石英	灰白	普通	内・外面ロクロナデ	S.E136 「大土」中	墨書 □

番号	種別	器種	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英	に赤い 質地	普通	墨書 沈縄間磨り消し 単縄繩文LR	S.D152 「大土」中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石 質	特 徴	出土位置	備 考
Q 5	瓶	12.5	6.1	2.1	360.0	粘板岩	腹墨面に楕円形のくぼみ 底部に「□三郎」春年五 などの刻書	表土中	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	色調	特 徴	出土位置	備 考
G 1	ガラス製品	ビール瓶	22	28.5	6.8	淡茶	サクラビール 百部まで合わせ日 制部に「サクラ」マーク ガラス内に泡	表土中	P L13
G 2	ガラス製品	ビール瓶	23	29.1	6.7	濃茶	キリンビール 日部まで合わせ日 制部に「K」、「B」のマーク ガラス内に泡	表土中	P L13
G 3	ガラス製品	ビール瓶	22	28.9	7.2	淡茶	サクラビール 百部まで合わせ日 制部に「サクラ」マーク ガラス内に泡	表土中	P L13
G 4	ガラス製品	ビール瓶	24	28.7	6.7	濃茶	キリンビール 日部まで合わせ日 制部に「K」、「B」のマーク ガラス内に泡	表土中	P L13
G 5	ガラス製品	ビール瓶	23	28.9	6.7	淡茶	大日本ビール 日部まで合わせ日 制部に「TRADE OF MAR K」の陽刻 ヒールに「DAINIPPON BREWER Y CO., LTD.」の陽刻 底部に「△」の陽刻 ガラス内に泡	表土中	P L13
G 6	ガラス製品	ビール瓶	24	29.6	6.5	淡青	日部まで合わせ日 底部に「6」の陽刻	表土中	P L13
G 7	ガラス製品	ビール瓶	24	25.5	5.2	淡青	百部まで合わせ日 ガラス内に泡・しわ・すじ	表土中	P L13
G 8	ガラス製品	ビール瓶	22	23.9	6.0	濃緑	金網サイダー 百部まで合わせ日 制部に織に「金網」の陽刻 底部に円形の盛り上げ部に「B」の陽刻 ガラス内に泡・しわ	表土中	P L13
G 9	ガラス製品	ビール瓶	22	23.5	6.0	濃緑	花月サイダー 百部まで合わせ日 制部に「花月」の陽刻 ビール に「東京石川日進会」の陽刻 底部に「K」の陽刻 ガラス内に泡	表土中	P L13
G 10	ガラス製品	サイダー瓶	—	(22.7)	6.0	濃緑	花月サイダー 制部まで合わせ日 制部に「花月」の陽刻 ビー ルに「東京石川日進会」の陽刻 ガラス内に泡・しわ	表土中	P L13
G 11	ガラス製品	サイダー瓶	22	24.0	6.0	濃緑	花月の陽刻 ガラス内に泡・しわ	表土中	P L13
G 12	ガラス製品	瓶	—	23.2	5.5	濃緑	王冠付着 ガラス内に泡・しわ・すじ	表土中	P L14
G 13	ガラス製品	調味料瓶	3.7	16.6	5.2	淡緑	胴部横断面形八角形 ガラス内に泡・しわ	表土中	P L14
G 14	ガラス製品	薬瓶	2.0	13.5	5.6	無色透明	百部まで合わせ日 脇部横断面形筋円形 脇部の八角形の盛り 上部に「住友医院」の陽刻 底部に泡・しわ	表土中	P L14
G 15	ガラス製品	化粧瓶	1.6	11.5	4.6	無色透明	百部まで合わせ日 脇部横断面に「レーベン」、「LAITFOO D」の陽刻 ガラス内に泡	表土中	P L14
G 16	ガラス製品	オイル瓶	—	(8.6)	7.0	無色透明	ランプのオイル入れ 瓶ガラス ガラス内に泡	表土中	P L14
G 17	ガラス製品	化粧瓶	5.8	7.6	4.7	淡緑	合わせ目が胴部までのびている ガラス内に泡・しわ	表土中	P L14
G 18	ガラス製品	大和糊瓶	6.1	5.6	6.0	淡緑	ガラス内に泡・しわ	表土中	P L14
G 19	ガラス製品	インク瓶	2.4	6.6	5.6	淡緑	制部まで合わせ日 ガラス内に泡	表土中	P L14
G 20	ガラス製品	インク瓶	1.9	5.7	4.0	淡緑	百部まで合わせ日 底部にマルゼンの「M」登録の陽刻 ガラ ス内に泡	表土中	P L14
G 21	ガラス製品	インク瓶	2.3	6.4	4.7	淡緑	首部まで合わせ日 ガラス内に泡	表土中	P L14
G 22	ガラス製品	インク瓶	1.9	5.4	4.0	淡緑	百部まで合わせ日 底部にマルゼンの「M」登録の陽刻 ガラ ス内に泡	表土中	P L14
G 23	ガラス製品	インク瓶	2.1	5.4	4.1	淡緑	百部まで合わせ日 底部にマルゼンの「M」登録の陽刻 ガラ ス内に泡	表土中	P L14
G 24	ガラス製品	ニッキ水瓶	—	(8.8)	2.6	無色透明	首部に円形の凹模様 脇部の円形の盛り上げ部に「平」の陽刻	表土中	P L14
G 25	ガラス製品	白型染め瓶	1.2	6.2	2.0	淡緑	胴部の長方形の凹部に「君が代」乙の陽刻 ガラス内に泡・しわ	表土中	P L14
G 26	ガラス製品	吸音瓶	2.8	2.6	2.9	淡緑	ガラス内に泡・しわ	表土中	P L14

番号	種別	器種	径	厚さ	重量	色調	特 徴	位置	備 考
G 27	ガラス製品	玩具	4.4~4.7	0.80	25.9	濃青	石けり 表面「のらくろ」 裏面木の葉の陰刻 ガラス内部に泡	表土中	P L14
G 28	ガラス製品	玩具	1.4~1.5	0.45	1.60	淡緑	おはじき ガラス内に泡	表土中	P L14
G 29	ガラス製品	玩具	1.4~1.6	0.50	1.90	淡緑	おはじき ガラス内に泡	表土中	P L14
G 30	ガラス製品	玩具	1.5~1.7	0.30	1.30	淡緑	おはじき ガラス内に泡	表土中	P L14
G 31	ガラス製品	玩具	1.4~1.6	0.40	1.40	無色透明	おはじき ガラス内に泡	表土中	P L14

第4節 まとめ

島名熊の山遺跡は、平成7年度から調査が実施され、これまでに『第120・133・149・166・174・190・214・236・264・280・291集』の11集が刊行されている。今回の報告分までの総調査面積は199.534m²で、古墳時代の在地豪族が律令体制に組み込まれながらも独自の基盤をもち続け、繁栄を続けた河内郡の中心集落の様相が明らかになっている。中世以降については、14・16区における中世・近世の景観復元が『第280集』で試みられている¹⁾。

本節では『第280集』の成果を併せながら、16区の平安時代及び中世の様相について考えまとめとする。なお、古代の時期区分は『第190集』²⁾、中世の時期区分は『第280集』³⁾に準拠する。また、古墳時代から平安時代にかけての住居跡の空間区分⁴⁾については、清水哲氏のA～F群の6群の区分を採用する。住居跡の規模については、一辶の長さが4m未満を小形、4m以上6m未満を中形住居、6m以上8m未満を大形住居とする⁵⁾。

1 平安時代

16区は住居跡E群に属し、9世紀後葉の第3022・3024号住居跡、第534号掘立柱建物跡が確認されている。第3022号住居跡は面積が50m²クラスの大形住居であり、これを中心に中形の第3024号住居跡、倉庫と考えられる2×2間の面積10.08m²の側柱建物跡によって構成されている。

E群には面積が50m²クラスの住居跡がもう1軒、第2665号住居跡が存在している(表11)。2軒の大形住居は、台地上の最も標高の高い23mに離れて位置している。この大形住居は、9世紀後葉におけるE群の有力者層の住居で、相互に関連しながら中心的な役割を担っていたものと考えられる。

第3022号住居跡の内部施設をみてみると、4か所の主柱穴の他に竈両脇に2か所のピットをもち、竈のある北壁の壁面に粘土が貼り付けられているのが特徴として挙げられる。竈両脇に2か所のピットをもつ住居跡は8世紀前葉から9世紀後葉間では、8世紀中葉を除いて本跡を含む計6軒が確認されている(表12)。また、住居跡群単位でみてみるとB～E群で確認されている。特定の時期・群に偏在する傾向はみられない。壁面に沿うように粘土を薄く貼り付けられている例は本跡のみで、これは棚状施設ではなく「壁構築土」と考えられる。壁構築土は、「壁の補強や化粧」のためのものと考えられている⁶⁾。竪穴住居が構築されている地盤が砂地などの軟弱な場所では補強の意味合いが強く、ロームなどの硬質な場所では装飾的な意味合いが強いものと考えられる。以上の2つの特徴をもつ住居は、本遺跡でも第3022号住居跡だけである。

表11 E群の9世紀後葉の竪穴住居跡面積一覧表

番号	主軸方向	規模(m) 長軸×短軸	面積 (m ²)	調査区	報告書 番号
950	N - 2° - W	3.50 × 3.30	11.55	9	166
1510	N - 9° - E	2.95 × 2.55	7.52	12	214
1533	N - 2° - E	[3.15] × 3.00	[9.45]	12	214
1604	N - 1° - E	3.58 × 1.00	3.58	12	214
1615	N - 2° - E	3.05 × 3.00	9.15	12	214
1658	N - 10° - E	4.05 × 3.95	16.00	12	214
2519	N - 1° - E	2.93 × 2.58	7.56	9	280
2565	N - 5° - W	5.17 × 5.07	26.21	12	291
2620	N - 6° - E	3.90 × 3.50	13.65	16	280
2621	N - 0°	3.86 × (3.64)	(14.05)	16	280
2647	N - 7° - W	2.76 × 2.40	6.62	16	280
2659	N - 3° - W	4.72 × (2.23)	(10.52)	16	280
2665	N - 3° - E	7.05 × 6.77	47.72	16	280
2731	N - 88° - W	4.05 × 3.45	13.90	12	291
2764	N - 5° - W	3.27 × 3.22	10.52	12	291
2779	N - 32° - E	3.42 × 2.95	10.08	12	291
2785	N - 80° - E	3.43 × 3.41	11.69	12	291
2953	N - 10° - E	3.30 × 3.11	10.26	9	291
2954	N - 8° - E	4.17 × 3.93	16.38	9	291
3022	N - 3° - E	7.42 × (6.60)	(49.00)	16	322
3024	N - 4° - W	4.21 × (3.70)	(15.58)	16	322

*9世紀後葉と特定されている住居跡だけを抽出して面積を算出している。

第3022号住居跡の出土遺物の特徴は、墨書き器が総数32点出土しており、「石」「大土」と書かれた墨書き器が多い。「大土」はこれまでにC～F群から確認されている文字である。それに対して「石」は、今までにE群だけからの出土で7点が確認されている。第2665号住居跡からも「石カ」「石□」が出土している。本跡からは破損や墨のかすれのため、完全に判読できないものも含めると、今までの確認数より多い9点が出土している。この特定の群からだけ出土する文字については、同一文字を共有する集団の標識文字と考えられている。本跡出土の「石」の筆跡の特徴や字画バランスに違いがみられ、同じ集団の標識文字の中で、いくつかのグループに分類できる可能性がある。

以上のように第3022号住居跡は中形住居と倉庫で構成され、第2665号住居跡とともに9世紀後葉におけるE群の「石」を標識文字とする集団の中心的な住居と考えられる。

2 中世

中世における当地域の時代背景を簡単にみてみる。古代島名郷は12世紀後半には、村田荘の一部として常陸平氏平直幹の支配下に入り、12世紀末には田中荘城となり下司職は多気義幹に伝えられたという。鎌倉幕府成立後の田中荘は八田氏（小田氏）の支配下になるが、1285（弘安8）年の霜月騒動を契機に田中荘は没収され、地頭職は北条氏となり後に北条得宗領となる。室町時代には小田氏が支配し、その土豪である平井氏が当地域を治めたといわれている⁷⁾。このように当地域の支配層が変わっていく中で、1297（永仁5）年に妙徳寺、13世紀後葉の島名前野東遺跡に中門廊的施設をもつ方形居館跡（西館）がつくられ、14世紀前葉まで田中荘の経営をおこなっていたことが判明している⁸⁾。

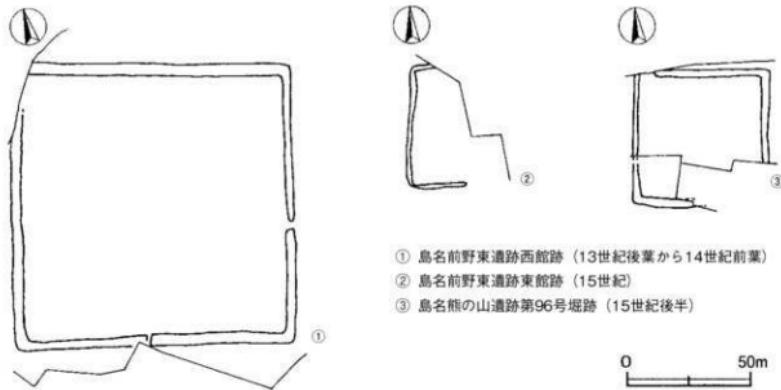
16区で確認されている遺構もこうした時代背景の中、人々が残した土地利用の痕跡と考えられる。本区は妙徳寺の南側前方に位置し、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、地下式坑、堀跡、溝跡、道路跡、井戸跡、墓坑などが確認されている。本区で確認されている遺構で最も古い時期の遺構は、15世紀後半の第96号堀跡で、半町四方の方形区画であることが判明した。区画の外側には方形竪穴遺構、地下式坑、井戸跡、溝跡などが確認されている。それに対して、区画内部で確認された同時期の遺構は第137号井戸跡だけである。第61～64・73号地下式坑は第62・64号地下式坑が堀を掘り込んでいることから、すべて堀よりも新しい時期のものと考えられる。区画が機能していた時期には強い規制が働いており、安易に土地の利用ができなかったものと考えられる。堀の規模の最大値は上幅3.24m、深さ176cmである。堆積土層から堀の内側肩部に土壙が構築され、覆土最下層に堆積したグライ化した粘土から機能時に當時漏水していたことがそれぞれ想定されている⁹⁾。

土壙と堀が方形に巡る施設の性格を考えるために、島名前野東遺跡の方形区画堀跡と比較してみる（第52図）。西館の方形区画堀跡の規模は方一町で、堀の規模の最大値は上幅4.26m、深さ154cmであり、第96号堀跡より規模が大きい。西館廃絶後の15世紀に成立する東館の区画溝は一辺約50m、堀の規模の最大値は1.12m、深さ66cmで、第96号堀跡より堀の規模は小さいが、同じ半町規模で建物跡が2棟確認されている。西館は鎌倉幕府と強い繋がりがある莊園の政所的な機能が想定されており、それよりも規模が小さく内部施設も劣る東館はそれとは性格や役割が異なるものと考えられる。第96号堀跡は島名前野東遺跡の

表12 竜両脇にピットをもつ古代の堅穴住居跡一覧表

番号	主軸方向	規模(m)		面積 (m ²)	時期	住居 跡群	調査区 域番号
		長軸	短軸				
872	N - 5° - W	5.50	5.12	28.16	8世紀前葉	B	11 166
1361	N - 10° - W	[6.60] × [6.25]	[41.25]	8世紀後葉	D	10 190	
951	N - 3° - E	[5.60] × [4.10]	[22.96]	8世紀後葉～ 9世紀前葉	E	9 166	
918	N - 3° - E	6.50	6.32	41.08	9世紀前葉	C	8 174
912	N - 12° - W	4.56	2.80	[12.77]	9世紀中葉	C	4 166
3022	N - 3° - E	7.42	6.45	[47.86]	9世紀後葉	E	16 322

東館の区画溝と同規模であるが、区画内部に建物等が確認されていないため島名前野東遺跡のような館を区画する堀かどうかは不明であるが、妙徳寺の南側前方に位置していることから、寺院との関係が非常に深い施設と考えられる。



第52図 中世田中荘（島名地区）の方形区画堀（溝）跡

方形区画堀跡が埋没した後の16世紀前半に、第95号堀跡が構築される。この堀は第155号溝と並行して南北に延びている。その延長に妙徳寺の参道があることから古い段階の参道の側溝と考えられ、幅9~12mが推測されている¹⁰⁾。今回の調査で第95号堀跡の延長が確認され、総延長150mでさらに妙徳寺に向かって調査区域外に延びていることが判明した（写真図版P L 1・2）。溝や堀に挟まれた空間が、通路として利用されていたものと考えられる。

以上、16区における平安時代と中世の様相を、すでに報告されている知見と併せながら9世紀後葉の大形住居である第3022号住居跡と、中世の第95・96号堀跡の性格を中心に考察した。特に第96号堀跡が方形に巡ることが判明したことは大きな成果である。当遺跡における中世の様相は、『第236・280集』で詳しく考察されている。既存の報告とともに、当地域における中世の具体像を明らかにするための一助になれば幸いである。

註

- 1) 酒井雄一「渡辺浩実 斎藤貴史 清水哲「島名熊の山遺跡 島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書類」「茨城県教育財团文化財調査報告」第280集 2007年3月
- 2) 福田義弘「島名熊の山遺跡 島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」「茨城県教育財团文化財調査報告」第190集 2002年3月
- 3) 註1文献と同じ
- 4) 清水哲「島名熊の山遺跡の集落研究のための前提作業」『年報26〈平成18年度〉』財団法人茨城県教育財團 2007年11月
- 5) 斎藤真弥 酒井雄一 渡辺浩実 松本直人 斎藤貴史 清水哲「島名熊の山遺跡 島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書XV」「茨城県教育財团文化財調査報告」第291集 2008年3月
- 6) 高橋泰子・多ヶ谷香里「古代堅穴住居に関する基本的用語の定義」「土壁 特集：変貌する古代堅穴住居跡像2－古代堅穴住居跡から新たに抽出できる情報－」第2号・考古学を楽しむ会 1998年5月
- 7) 谷田部の歴史編さん委員会「谷田部の歴史」 谷田部町教育委員会 1975年9月
- 8) 小松崎和治「島名坂道跡 島名前野東遺跡 島名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書」「茨城県教育財团文化財調査報告書」第281集 2007年3月
- 9) 註1文献と同じ
- 10) 註1文献と同じ

写 真 図 版



調査区遠景（東より）



調査区遠景（南より）

PL2



調査区近景(1)



調査区近景(2)



第3022号住居跡
完掘状況(1)



第3022号住居跡
完掘状況(2)



第3022号住居跡
遺物出土状況

PL4



第3024号住居跡
遺物出土状況



第3025号住居跡
完掘状況



第534号掘立柱建物跡
完掘状況



第534号掘立柱建物跡
確 認 状 況



第534号掘立柱建物跡
柱抜き取り痕確認状況



第70号地下式抗
完 挖 状 況

PL6



第72号地下式抗
遺物出土状況



第135号井戸跡
完掘状況



第140号井戸跡
完掘状況



第95号堀跡
完掘状況



第96号堀跡
完掘状況(1)



第96号堀跡
完掘状況(2)

PL8



第152号溝跡
完 壓 狀 況



第217号溝跡
完 壓 狀 況



第218号溝跡
完 壓 狀 況



第5917号土抗
完 壕 状 況



第5923号土抗
完 壕 状 況

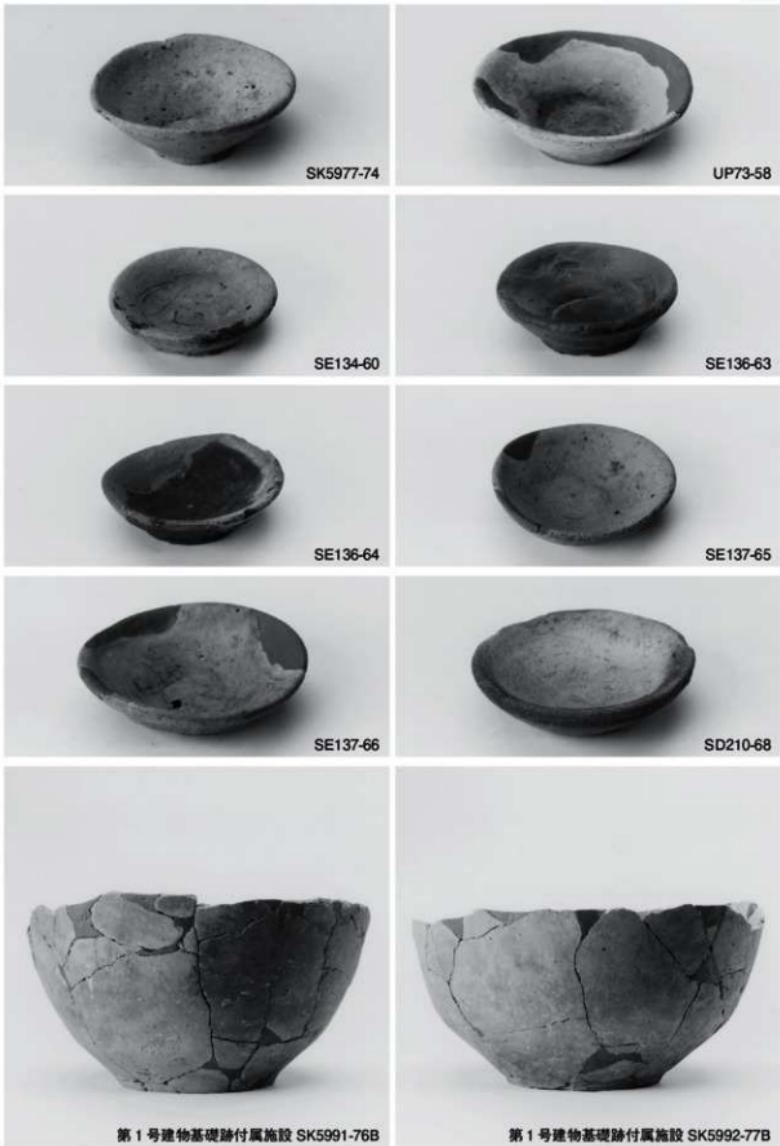


第5927号土抗
完 壕 状 況

PL10



出土遺物(1)



出土遺物(2)

PL12



SI3022-1



SI3022-5



SI3022-8



SI3022-9



SI3022-15



SI3022-17



SI3022-18



SI3022-19



SI3022-20



SI3022-21



SI3022-29



遺構外 -78

墨書土器



遺構外出土遺物ガラス製品(1)



抄 錄

茨城県教育財団文化財調査報告第322集

島名熊の山遺跡

島名・福田坪一体型特定土地地区画内整理
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成21（2009）年3月18日 印刷

平成21（2009）年3月23日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 富士オフセット印刷株式会社
〒310-0967 水戸市根本3丁目1534-2
TEL 029-231-4241㈹

